

AATJ 2017 ANNUAL SPRING CONFERENCE

PART ONE

Sheraton Centre Toronto Hotel, Toronto, Ontario

**Meeting Rooms (Mezzanine Level): Linden, Cedar, Pine West, Pine East, Chestnut West,
Chestnut East**

Thursday, March 16, 8:30a.m.-4:00 p.m.

(On-site Registration and Check-in: Mezzanine Level)

Coffee and tea will be available all day in the Birchwood Ballroom, where publishers and other organizations will also be displaying their publications and services.

*Papers whose titles appear in Japanese in the program will be delivered in Japanese;
those with only English titles will be delivered in English*

8:30 a.m.-10:10 a.m. — Session 1

SESSION 1-A: PEDAGOGY PAPERS [PINE EAST ROOM]

Chair: Noriko Fujioka-Ito, University of Cincinnati

「イマージョン教育の児童と卒業生の日本語能力：生涯教育としての日本語教育への示唆」 (**Language ability of Japanese English immersion children and graduates: Implications for Japanese language learning as lifelong education**)

Asako Hayashi-Takakura, University of California, Los Angeles; **Tetsuo Harada**, Waseda University

近年、北米や欧州の大学に於ける外国語教育では内容重視教育 (CBI) が注目されている (Snow & Brinton, in press)。CBIは、言語学習と内容学習の割合により、様々なアプローチがあるが、中でも学習者が学校教育を受け始める時から教科を第二言語で学ぶイマージョン教育は、最も内容中心(Content-Driven)のCBIモデルと言われている (Met, 1999)。イマージョン教育では、言語と教科を同時に学ぶことを目的としているが (Tedick, Christian, & Fortune, 2011)、言語習得の観点から、正確さの欠如や習得速度の遅延などが指摘されている (Lyster, 2011)。そのため、高等教育の外国語教育の現場では、イマージョン教育を疑問視する傾向がある。本研究では、カリフォルニア州の公立小学校の日本語イマージョンプログラムの児童 (小学1年~6年) のオーラルコミュニケーション能力を個人インタビューにより横断的かつ縦断的に測定し、言語能力、談話能力、社会的文化能力、方略的能力の観点から分析した。さらに日本語イマージョンプログラムを卒業後、継続的に日本語を学習した学習者が、高校入学時にどの程度の日本語能力に達しているかをACTFL OPIの指標に従い、測定した。これらの結果を基に、本発表では、イマージョンプログラムで日本語を学習した学生が、高校、大学で、どのような日本語、コミュニケーション方略を学習するべきかを提案したい。本研究が、生涯教育としての日本語教育を考える上で、早期外国語教育の重要性と内容重視の教育法の意義を再考する手がかりとなることを期待する。

「日本語教育における「批判的多文化教育」-ソーシャルネットワークワーキングアプローチ (SNA) を指標とした実践報告」 (**"Critical multicultural education" in Japanese language education using a social networking approach (SNA)**)

Kimiko Suzuki, Haverford College; **Jisuk Park**, Columbia University

21世紀に入り、言語能力偏重の言語教育の再考がなされ、多文化教育の重要性が唱えられている。久保田 (2015) は、文化を単一的・伝統的・固定的なものとして扱う傾向を問題視し、文化を多様で能動的、また社会的・政治的・言説的に構築されるものと捉える「批判的多文化教育」を行う意義を主張している。では、具体的に外国語教育の現場ではどのように「批判的多文化教育」を実践できるだろうか。當作 (2013) は外国語の学習を通して、社会づくりに貢献できる人間を育てることを目標としたソーシャルネットワークワーキングアプローチ (SNA) を提唱している。SNAでは多様な言葉や文化的背景をもつ人々が共生し協働できる社会を作り上げる為に、多様性を尊重しながら調整し、共有できる価値を模索することの重要性を訴えている。本発表ではこのSNAを指標にし、「多様性」をテーマに教室内外で交流をし、自他の関わりを深め、最終的には学習者が社会の一員としてどのような貢献ができるかを考えることを目的として行った教室活動の実践報告をする。学習者は「多様性」という一貫したテーマで、教室内でのディスカッション、ジャーナル、口頭試験、オンラインディスカッションボード、エッセイに取り組んだ。これらの活動を通し、多様性の抱える人種・階級の政治性等の複雑な問題について理解を深め (久保田, 2015)、自己の考えを振り返るとともに、相互に影響を与え合いながらどのようにその問題に対処していけばいいかについて考えを出し合い、共有した。発表では、参加者同士の交流・活動内容を詳細に分析し、SNAを指標にした批判的多文化教育を取り入れた教室活動の実践の意義や可能性を検証した上で、今後の課題も考察する。

「日本語学習者の将来を成功に導く要因の探求—卒業生たちのライフストーリー—」 (**Exploring factors enabling success in the future lives of Japanese language learners: Life stories of university graduates**)

Noriko Fujioka-Ito, University of Cincinnati

日本語を学習することはどのような意味があるのかを探求する方法の一つとしてライフストーリーが脚光を浴びている（三代, 2015）。調査者と日本語学習者がインタビューの中での相互作用を通して共同で産出するストーリーは、実践・学習・人間関係が絡むいくつもの共同体を移動しながらアイデンティティを更新していく学習者の体験にアクセスできる貴重な手段である（中山, 2008）。本発表では、学部時代に日本で実践的な研修を行ない、卒業後にプロフェッショナルとして成功を収め、さらに成長を続けている調査協力者3名の10年以上に渡る人生のストーリーを扱う。調査協力者が母語や専門分野の知識といった文化的資本を使用して、実践の場で互恵的なネットワークを作る過程で形成し、生活の場を移動しながら再構築していったアイデンティティの変化についてインタビューをして分析した。その分析結果から、日本での経験を将来の成功に結び付ける要因となった共通要素は、(1) 新しい文化に同化でき、築いた人間関係を持続し発展できる異文化技能や柔軟性、(2) 困難に直面してもそれを克服し、次の段階の飛躍へとつながられる問題解決能力、(3) 第二言語学習を含む学びの活動を自発的意思に基づいて行える生涯学習能力などの21世紀型スキルの育成と保持であるため、このような能力を促進するための日本語教育への示唆を話す。さらに、ライフストーリーの調査を実施する際、実験研究で基準となる倫理的絶対主義による確固とした原則は用いずに、倫理は具体的状況の中で創造的に生成するものだと考えられていること（桜井, 2012）などの調査方法についても説明する。

「日本語学習の未来予想図：近年の傾向と今後の動向」 (Significance of increased numbers of self-learners for Japanese language instruction)

Masami Ikeda, Massachusetts Institute of Technology

アメリカ東海岸にある本工科大学では、近年独学で日本語の四技能を習得する学生が急増し、大学での日本語コース履修前に、既に中上級レベルに達している例も珍しくない。この背景には、学習者が様々な交流サイト上で、同じ興味を有する日本語母語話者と容易に繋がれるようになったことや、スマートフォン（以下スマホ）の急速な普及に伴い日本語学習の選択肢が飛躍的に増加したことなどがある。例えばLang-8から生まれたスマホ版HiNativeのように、ユーザー同士の教え合いの精神で成り立つ外国語学習コミュニティでは、スマホに特化した質の良いアプリが続々と登場している。独学者へのインタビューによると、学習者が投稿した質問に即座に複数の日本語母語話者から回答が得られる即効性や、個々の興味やニーズに合わせて学習アプリが立てた計画をこなすだけで日本語習得ができるという個別対応性が、無駄を極力省こうとするデジタルネイティブに積極的に受け入れられているようである。この独学嗜好は近年の本学の日本語コース履修者数にも反映されており、初級がやや減少か横ばいであるにもかかわらず、中上級は、独学編入者が加わることにより増加している。では、独学者の日本語のレベルが今後さらに向上し続けた場合、日本語プログラムはどのような影響を受けるのか。日本語の授業は時間の無駄とみなされ、学生は授業を取らずに独学のみを選択するようになるのだろうか。教師の指導やアドバイスは不要になるのか。本発表では、近年における学習者の傾向と独学経験者へのインタビュー結果を分析しながら、プログラム全体の在り方、日本語クラスの意義、教師の役割などについて、今後の課題や対応策を考察する。

SESSION 1-B: PEDAGOGY PAPERS [CEDAR ROOM]

Chair: Yukiko Yoshizumi, University of Lethbridge

“Application of multiliteracies in Japanese language pedagogy with the theme of gender”

Emi Okano, University of Oregon

The goal of this study is to suggest one possible way of applying multiliteracies into Japanese language pedagogy, and to see how it helps learners to negotiate their own identities. A pedagogy of multiliteracies is text-based, and has language learners focus on different modes of representation of meanings (e.g. visual, audio, spatial, behavioral, etc.) (New London Group (NLG), 1996). Through the practice of interpreting texts whether they are spoken or written, language learners become able to notice "Available Designs" (multimodal resources for meaning making) surrounding them, and "Design" their own language use (NLG, 1996, p.74). Communicative Language Teaching (CLT) is now widely favored in Japanese language programs in America, but some claim that CLT undermines culture learning and interpretations of texts since it heavily focuses on functional language production (cf. Kumagai & Lopez, 2016). Therefore, this study built a lesson plan under the theme of "gender" including two genres: didactic texts and Japanese TV drama. The author taught the lesson plan to advanced Japanese learners, video-recorded the class, and analyzed the recording to see how learners redesigned their own identities in relation to the topic of gender. The lesson could successfully encourage learners to be aware of different textual features used by female and male writers in the didactic texts, and various Available Designs employed by characters in TV drama who have distinct gender identities that are mediated through their different social positions and personalities. Consequently, language learners became more sensitive to their choices in meaning-making process, and could create their own "Redesigned" Japanese.

「ジェンダーマイノリティと日本語教育：「男言葉」「女言葉」をどう扱うか」 (Gender minority students, "women's language," "men's language," and Japanese language instruction)

Jotaro Arimori, University of Toronto

本発表では日本語の性差と学習者のアイデンティティの観点から日本語教育を問い直し、特に教師がLGBTQ (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, and Queer) をはじめとするジェンダーマイノリティの存在を意識する必要性と、教育実践について議論する。日本語は特に話し言葉において話者の性別による相違が顕著だとされている。その一方で、90年代以降、日本語とジェンダーに関する研究が進み、それまで絶対的であると考えられていた人称代名詞や終助詞などの性差も、実際の使用においては必ずしも固定的ではないことが明らかになってきた。しかしながら、教科書や参考書、日本語教育関連の書籍等では依然として男性・女性という性別二元制を前提に、言葉の性差と用法が説明されているのが現状である。もっ

とも、これらの表現形式をどちらかの性を用いるものとして説明すること自体はわかりやすく、典型的な用法を示すという点では合理的とも言える。しかしそれではジェンダーマイノリティの学習者の存在と彼らのアイデンティティに関わる問題が見逃されてしまう恐れがある。最近の北米及び日本の調査では、人口に占めるLGBTQの割合は6-8%と推計されており、約14人に1人に相当する。このように学習者にジェンダーマイノリティがいても不思議ではない状況で、教師が学習者を異性愛者の男女であると見做し、単純に「男言葉」「女言葉」として性差を扱うことは、言語使用の実際を反映していないだけでなく、彼らのアイデンティティを脅かし、学習意欲を削ぐことにもなりかねない。本発表では日本語とジェンダー、アイデンティティ、クィアペダゴジー等の研究を踏まえ、日本語教育の場において、言葉の性差をどのように取り上げるべきかを検討する。

**「CoBaLTTを参考にした中級日本語カリキュラムデザインの試み-多角的視点からの分析思考力を育てるために」
(Designing a curriculum for intermediate Japanese using CoBaLTT to foster global critical thinking)**

Kyoko Matsui Loetscher, Columbia University

CBIが、外国語教育におけるカリキュラムデザインのために効果的なアプローチであるということは、様々な分野での理論やリサーチによってサポートされている(Tedick & Cammarata, 2010)が、CBIがteaching philosophyであり、methodではないため、実際に何を内容とし、それをどう教えるか、未だ大きな課題となっているのが現状であろう。内容と言語学習が統合されたカリキュラムをデザインするために重要なことは、内容学習と言語習得の目標を明確に設定すること、その目的遂行のために、教材選び(analyzing text)、タスクデザイン、assessmentの選択を注意深くすることの二点であると考える。本発表では、多角的視点からの分析思考能力を育成することを目標にし、内容と言語学習を効果的に統合するために、ミネソタ大学のCoBaLTT Web Resource Centerのinstructional moduleを参考に試みた、中級日本語コースにおけるカリキュラムデザインについて述べる。テキストには、2015年の川崎中1男子殺害事件についての新聞記事を基に、その事件の背景にある様々な社会問題(格差社会、少年法、ネット社会の問題等)についての記事を使用した。事件を引き起こした原因を様々な角度から分析することによって、現在の日本社会、ひいては、世界に存在する問題の本質について考えた。その後、それらの社会問題について、ペアでさらに調べ、その問題解決についても考え、レポートとしてまとめた。クラスで口頭発表し、意見も交換した。本発表の最後に、学生によるカリキュラムの評価も紹介する。

“Behavior approach to students with autism spectrum disorder in Japanese language class: Supporting students and providing academic accommodation”

Takami Taylor, University of West Florida

Autism spectrum disorder (ASD) is a group of developmental disabilities that can cause significant social, communication and behavioral challenges (Centers for Disease Control and Prevention). According to the *Harvard Review of Psychiatry* (2013), the number of students with high-functioning ASD in higher education has increased in the past decade and is expected to rise. Many instructors may have or have had students with ASD in their classes. It appears there is a great deal of research in the field of Japanese language education. However, there is hardly any research on students with ASD in Japanese language education. Japanese language educators should understand the unique academic needs of those students and learn the unique learning process of this specific underrepresented student population (Wei, 2016). It is ideal to identify effective pedagogy for them; however, it is not yet practical due to the small number of students whom each instructor may have in class. It is more practical to understand the characteristics of those students so that instructors could provide appropriate accommodations that meet students' unique needs and help them succeed in Japanese study. This is relevant to any instructors as federal legislation mandates that those students have equal access to higher education and providing reasonable accommodations is required (Americans with Disabilities Act Amendments Act of 2008). In this presentation, the characteristics of high-functioning ASD students and the limitation of traditional accommodations will be discussed and possible academic accommodations based on basic principles of Applied Behavior Analysis in Japanese language classroom will be suggested. This presentation is not a data-based research study, but it is aimed to raise awareness the unique needs of students with high-functioning ASD and understand the current situation and challenges that language instructors face in classrooms.

SESSION 1-C: LANGUAGE & CULTURE SIG PANEL [LINDEN ROOM]

Chair: Janet Ikeda, Washington & Lee University

Panel Title: “Lessons from a Tearoom Window: The Japanese Tea Ceremony and Today's Learner”

Panel Abstract: The study of a sixteenth-century traditional Japanese art form known as *chanoyu* (tea ceremony) seems even more relevant today in a world where a contemporary *gekokujo* seems to have toppled the very way in which students communicate, learn and think. The influence of social media, the demanding presence of the Internet, and an armory of electronic gadgets seem to reshape the very way in which our students view learning language and the way in which they view the world. As we prepare them for the global workplace, there are many lessons they can take away from a tearoom experience. This panel brings together a unique group of individuals who not only teach at institutions of higher education, but who are tea ceremony practitioners. They will show how practicing or even simply observing a tea ceremony can help students develop their communication skills and gain a cultural competence. There is a wide array of topics among the proposals: learning how structured verbal and nonverbal communication work in the tearoom, understanding the sense of unity of the communal setting, being constantly aware of others, seeing communication as interpersonal and meditative, recognizing the physicality and multi-sensory aspects of communication, sharpening the power of observation outward and inward, and bringing a literary and aesthetic appreciation to one's daily life. The famous tea master Sen no Rikyū explained that *chanoyu* is nothing more than

boiling water, adding tea, and drinking. As with many other characteristics of Japanese culture, there is much more to discover behind the words.

“OF CLOUDS AND WATER: The beauty of experiential learning”

Alexandre Avdulov, St. Mary's University, Halifax

Cultural competence can be added as the fifth language competence along with reading, writing, hearing and speaking. Today's language teacher needs to be able to bridge cultures of the target language and to also take into consideration the existence of the "mini globe" of students in the classroom. There is no GPS to navigate this practically kaleidoscopic reality. It demands new views and innovative approaches in order to deliver what a citizen of the world needs. Today's teacher has to be not only culturally sensitive but also possess a multicultural awareness. Contemplation fosters additional ways of knowing that complement the existing methods of the traditional liberal arts education. As Tobin Hart states, "Inviting the contemplative simply includes the natural human capacity for knowing through silence, looking inward, pondering deeply, beholding, witnessing the contents of our consciousness... These approaches cultivate an inner technology of knowing." ("Opening the Contemplative Mind in the Classroom," *Journal of Transformative Education*, Vol. 2 No. 1, January 2004.) Contemplative pedagogy uses methods designed to quiet and shift the habitual chatter of the mind and to cultivate a capacity for deepened awareness, concentration, and insight. Getting students physically and emotionally involved in the learning process gives them better spatial and temporal awareness as well as awareness of each other. Sensory engagement offers students the therapeutic effects of cultural experience as well as better understanding of the subject. Research confirms that contemplative forms of inquiry can offset the constant distractions of our multi-tasking, multi-media cultural environment. Thus, creative teaching and learning methods that integrate the ancient practice of contemplation innovatively meet the particular needs of today's students and teachers. This presentation will highlight the teaching and learning experience derived from the course "Japanese Aesthetics as expressed through Chanoyu."

“To talk or not to talk?: Conversation in Japanese tea ceremony”

Suwako Watanabe, Portland State University

"You are not allowed to talk during a tea ceremony?" This is one of the questions frequently asked by observers of a Japanese tea ceremony presentation based on a misconception that guests must remain silent throughout a tea gathering. Conversation does take place during tea gatherings, but it varies depending on the type of event, and it is different from casual conversation in everyday life in terms of topics, purpose, process, and how one develops conversational skills. Based on analyses of literature on tea ceremony including how-to books and textbooks on conversations in tea gathering and observations during tea classes and tea gatherings, I will show the following characteristics: a principal purpose of communication during a tea gathering is to achieve a common goal of *ichiza konryu*, construction of a sense of unity, which bears implications for politeness; participants are expected to co-create and experience the extraordinary while putting their ordinary life on hold; to become skillful at conversing in a tea gathering appropriately requires of tea students, even when they communicate in their first language, a great deal of practice, sensitivity, aesthetic values, and knowledge about traditional arts including literature. Examination of how tea students develop their communication skills through prescribed and spontaneous exchanges during class time reveals a resemblance to a developmental process of Japanese learners acquiring conversation skills in that they begin by attending to forms at first and transition to the phase where they focus on content and consideration for interlocutors. In this paper, I will first discuss the features of communication in a tea gathering and the developmental processes during tea classes through concrete examples of discourse, and, secondly, demonstrate that Japanese tea ceremony offers significant implications (i.e., adaptive and spontaneous natures of communication in Chanoyu) for Japanese language learning.

“What can students and people in the community in the US learn from Japanese tea ceremony?”

Polly E. Szatrowski, University of Minnesota; Fumio Watanabe, Yamagata University

Tea ceremony is a form of meditation and interpersonal communication learned through making, offering and drinking *matcha* (frothy green tea). This paper addresses two questions: 1) What can students learn from practicing tea ceremony in the US, and 2) What can the community learn from attending workshops and performance/demonstrations of the tea ceremony. Based on observations, students' comments, and event surveys, we will report on the following. Students experience a new way of learning with their bodies, the Japanese language, and their five senses in the cooperative tea ceremony activities distributed among the tea maker, assistant(s) and guests. They learn how to create and move together in the tea room, view the *tokonoma* (alcove with hanging scroll, flowers, etc.), make tea, touch and appreciate the tea utensils, hear the wind in boiling water, and share in tasting and smelling *okashi* (sweets) and *matcha*. Students improve their ability to use the Japanese language in context, heighten their observation abilities, gain awareness of their bodies and how their individual movements are dependent on others, and develop a spirit of cooperation. Students and the community can learn about Japanese language and culture by attending workshops, tea ceremony performances, etc. Through workshops people can learn how to create tea utensils and appreciate tea ceremony's connections with nature. In interactions and performances with visiting tea practitioners from Japan, students realize how their training allows communication on a new level. At tea ceremony performances with accompanying explanation people can participate in the tea room or partake in *matcha* and *okashi* at their seats. Surveys show that these events provide a window into the multi-faceted world of tea, including tea utensils, flowers, kimono, tea and tea cakes, *kakejiku* 'hanging scroll', etc. and their hidden meanings. Tea ceremony contributes to students' and the community's knowledge and experience of Japanese language and culture. It also raises students' interest in studying Japanese and going to Japan.

“Making culture come alive: Teaching the literary aspects of chanoyu”

Janet Ikeda, Washington & Lee University

In this paper I will focus on how teaching the Japanese lyric tradition in a class on *chanoyu* can make culture vibrant and relevant. Our goals in including a *haiku* or *tanka* into the Japanese language classroom may be to have students grasp the

nance of the literary image, unravel an allusion, absorb the beauty of the language or memorize a well-known line. Just as traditional poetry is communal, performative, visual and intertextual (Shirane, Haruo), so too is *chanoyu*. Tea masters loved poems by Teika and Ietaka, they gained inspiration from a poetic ideal such as the "chill and withered," they assigned poetic names to beloved utensils, they wrote didactic poems, and in the end some left a carefully crafted death poem. Teaching a seemingly esoteric course on *chanoyu* -- its history, cultural roots, the practice of tea today, the emphasis on lineage within the traditional arts, the primary focus on "form" and such -- can contribute much to students' understanding of Japan. Dennis Hirota's translation in *Wind in the Pines* of *kareno no susuki* as "pampas grass on the withered moor," from the linked-verse poet Shinkei's treatise known as *Sasamegoto*, became the class mantra one semester whenever the discussion turned to *wabi-cha* or the aesthetics of the medieval period. Inevitably, during classroom discussion or a tea practice session, someone would shout out the "pampas grass" line in response to a reference to the "moon hidden behind clouds" or "a fine steed tied to a thatched hut." I began to realize how teaching about *chanoyu*, by combining the American academic tradition of lecture and discussion with the Japanese hands-on experience of *okeiko*, had left an indelible mark on students.

SESSION 1-D: PEDAGOGY PANEL [PINE WEST ROOM]

Chair: Shinji Sato, Princeton University

Panel Title: 「「ウェルフェア・リングイスティクス」と日本語・日本文化教育:参加者の多様な資源を生かした言語文化教育」 ("Welfare Linguistics" and Japanese Language and Culture Education: How to Utilize Learners' Diverse Resources in Language and Culture Education)

Panel Abstract: 言語文化教育研究では、ある言語・文化と別の言語・文化の間に明確な境界線が引けるということを前提とし、言語教育関係者の言語教育に関するピリーフが構築され(嶋津2016)、教育活動が計画されていることがわかっている。一方、人々の日常の言語使用では、その境界線は明確ではなく様々な言語資源が複雑に絡んで用いられていることも明らかになっている(Pennycook & Otsuji 2015)。しかし、そのような日常の言語使用の状況を考慮に入れた実践報告はほとんどなされていない。したがって本パネルでは、学習者のもつ資源を最大限に活用できるよう設計された「ウェルフェア・リングイスティクス(徳川1999)」とそれに関連した理論を概観し、そのような視点からの言語文化教育実践を報告する。今回報告する実践は1) インフォーマルなおしゃべり交流会、2) 日本文化理解教育の一環としての地域の祭り参加活動、3) 日本語学校の交流型活動である。これらの報告では、実践における参加者の成長と変化を、活動中の参与観察やビデオ、活動後のアンケートやインタビューなどを分析することにより明らかにする。分析では特に、学習者が「社会参加」(佐藤・熊谷2011)の過程で、それぞれが持つ様々な資源を用いコミュニケーションを行った結果、その経験が学習者の「日本語能力」や日本語使用、アイデンティティに与えた影響、また、彼らがコミュニティに与えた影響などについて考察する。これらの実践報告は日本で行われたものではあるが、その知見は場所を問わず示唆に富むものであると考える。最後に、学習者のもつ多様な資源を最大限に活用できるような「多言語・多文化」に開かれた日本語教育の可能性を会場のみなさんと考えていきたい。

「「ウェルフェア・リングイスティクス」と最近の言語コミュニケーション(教育)研究の理論」(Welfare linguistics and recent theories in language communication (education) research)

Shinji Sato, Princeton University; Yuri Kumagai, Smith College

ウェルフェア・リングイスティクスとは「人々の幸せにつながる」「社会の役にたつ」「社会の福利に資する」言語コミュニケーション研究である(徳川1999)。ウェルフェアが「幸せ」や「豊かさ」を意味する言葉であり、すべての人に最低限の幸福と社会的援助を提供するという理念であるとするならば、日本語教育が日本語だけに焦点を当てていると、日本語を話さないものはあるコミュニティに入れず、日本語の出来具合によって成員を序列化してしまうという問題を生み出すことになる。日本語を第2・3の言語として学ぶ成人学習者は、コミュニケーションの資源としてすでに自分の使いこなせることばを持っているという事実を鑑み、状況と目的に応じて日本語を含めたすべての言語資源をいかにうまく使いこなしていくかを学習者と考えていくことで、日本語教育にウェルフェア・リングイスティクスの理念を実現していくのではないかと考える。本発表では、まず、人々の日常の様々な言語使用の検証を通し、言語学習において、学習言語だけを用いる、つまり母語と学習言語を区別するという発想の利点と問題点を、最近のコミュニケーション研究の理論、メトロリンガリズム(Pennycook & Otsuji 2015)、トランスリンガルアプローチ(Canagarajah 2013)、トランスランゲージング(Garcia & Wei 2014)と照らし合わせ議論を行う。次に、言語を区別するという発想の問題点を踏まえた上で、「ウェルフェア・リングイスティクス(徳川1999)」とそれに関連した3つの分野、学習者のアンデンティティ(Block 2007)、言語生態学(岡崎2009)、市民性形成(細川・尾辻・マリオッティ2016)を紹介し、「ウェルフェア・リングイスティクス」をめざす言語・文化教育の可能性を考えたい。

「多言語おしゃべり交流会の意味づけ:言語生態学の視座から」(The role of a multicultural language table: From the viewpoint of ecology language learning)

Yumiko Furuichi, University of Tokyo

T大学の日本語教室では、大学内の様々な背景を持つ留学生と日本人学生がランチタイムに気軽に語り合うことを目的に、2011年から「おしゃべり交流会」を主催している。2011年度~15年度までは「Japanese lunch table」と名づけ、日本語の練習、交流の場として位置づけていたが、参加者は約30名で流動的だった。2016年度から私とあなたの人間関係作りを重視し、参加者が既存の言語能力を有機的に活用、交流することを目指して、「多言語おしゃべり交流会International café for you」と改めた。その結果、参加者が2倍の約60名に増加した。本発表では「言語生態学(岡崎2009)」の視座から、

参加者がどのように「多言語おしゃべり交流会」を意味づけているのかを報告する。「多言語おしゃべり交流会」の参与観察、アンケート、インタビューをSCAT: Step for Coding and Theorization (大谷2008)分析した結果、以下のことが明らかになった。1) 語学力の向上: 各人が主体者として言語を選択しながら、目的達成のために情報を伝え、受け取っており、「意味あるやりとり」が可能となっている。2) 交流: その時その場で、日本語、英語また他の「言葉を借り」、「共助」によるコミュニケーションを用いて、互いの交流を深めている。3) リラックス: 多言語環境下での自由なおしゃべりは「安心して」自分の言葉で話したいことを話すことができ、心理的な負担を軽減している。このように「おしゃべり交流会」は、多言語化によって、誰もが言語資源を十二分に発揮し、他者との関係性を編みなおす人間活動の場であり、言語生態系を保全・育成する場になったと考えられる。言語の福祉 (wellbeing) が人間の福祉 (wellbeing) の拡大に結びつき、ウェルフェア・リングイスティクスの理念に即した実践となった。

「地域への越境で得た学び: 学習者のアイデンティティの変化に着目して」(Observation of a Japanese language learner, her participation in a local community, and changes in her identities)
Kaori Shimasaki, Tohoku University

T大学では、交換留学生在が地域の人々とともにすずめ踊りの練習をし、仙台青葉まつりに参加するという活動を文化理解の授業の一環として実施している。本発表では、その活動が日本語学習者にどのような変化をもたらしたのかを実践コミュニティ (CoP) と越境の概念を用いて分析する。CoPとは、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を持続的な相互交流を通して深めていく人々の集団」(Wenger他 2002: p.4)であり、学習者は1つのCoPで完結することなく、複数のCoPを行ったり来たり越境することで、アイデンティティが変化し、それに伴って学びが深まると考えられている(有元 2012)。これまで言語教育の分野では、越境の概念を用いた学びの分析はほとんど行われていない。本研究では、2016年に活動に参加したジェニーという一人の学生の変化について、祭りの後に収集した彼女の省内、インタビューデータをCoPや越境の概念を使って質的に分析した。ジェニーは祭りに参加したことで、「初級日本語学習者」で、「T大学の交換留學生」なのだが、日本社会や日本人からは切り離されている「よそ者」というアイデンティティから、新たに「仙台市民」というアイデンティティを持つことができ、日本語を使うことにも自信が生まれた。地域への越境がジェニーの生活や言語に大きな影響をもたらしたようだ。言語教育は、ことばを教えることにだけ焦点を当てられがちであるが、学習者の言語習得だけではなく、学習者がどんなアイデンティティを持ち、言語を使用するのかといったことにも目を向け、学習者の周囲の環境づくりについてウェルフェア・リングイスティクスの観点から考えていく必要がある。

「ウェルフェアリングイスティクスの枠組みから留学生の地域奉仕活動を考える」(The role of community service by international students: From the viewpoint of welfare linguistics)
Makiko Matsuda, Kanazawa University; Taeko Kimura, Ehle Institute, Osaka

本発表では、大阪市浪速区の外国人向け専門学校A学園における地域奉仕活動の事例をとりあげる。浪速区は若年層人口の減少による地域行事の担い手不足、外国人人口増加による国際化の問題など多くの問題を抱えている。そうした背景を受け、A学園は2006年から留学生在が学校周辺の地域社会と積極的に交わり、地域清掃活動等、地域住民に自ら奉仕することによって関係改善を図ってきた。今回分析に使用したデータはA学園の2つの活動(2016年10月に行われた老人介護施設での交流活動と難波駅周辺の清掃活動)である。活動に対しては非参与観察を行い、動画データを収集した。活動後に学生、社会福祉協議会スタッフ、担当教員に半構造化インタビューを行い、データを文字化・コーディングし、質的に分析した。その結果、奉仕活動を行うことで、住民、留学生双方に自分の町を自分自身で管理し、育てる意識(市民性)が形成されていたこと、10年前は地域と留学生在が断絶し、関係性も悪化していたが、活動によって顔の見える関係性が形成され、コミュニティの断絶と地域の諸問題が解消されたこと等が確認された。この事例をウェルフェアリングイスティック(徳川1999)の枠組みから振り返ると1)日本人住民と学生双方の市民性(細川2016)の育成、2)コミュニティのネットワークの強化、3)「A学園の子」というアイデンティティによる定住若年層としての社会参加、4)日本語を含むトランスラングエージングな交流と学びの場の創出、5)自己肯定感の相互付与、等の優れた点が見えてくる。今後は、教室活動と奉仕活動を有機的に結び付けることで市民性教育と言語教育をつなぐことができると考える。

SESSION 1-E: LITERATURE PAPERS [CHESTNUT WEST ROOM]

Chair: Joanna Sturiano, Bates College

“Translating the classics: Gender, authorship, and the canon in the *Anthology of Japanese Literature* (2014-2018)”
Hitomi Yoshio, Waseda University

In 2014, Kawade shobo began publication of the thirty-volume *Anthology of Japanese Literature*, which endeavored to present a new canon of Japanese literature by positioning itself as an integral part of “world literature” (*sekai bungaku*). In addition to the unorthodox selection of texts extending from Kojiki to the present, what distinguishes the anthology are the “contemporary translations” of classical works by popular living authors, which aim for not only readability but also a supposed reinvigoration of the classics through the signature stamp of modern-day writers. While translation is never merely a mimetic linguistic transfer, this emphasis on the translator/writer brings to light what is normally rendered invisible, subverting a series of hierarchies between the original and translated texts, and male and female authorship. There is increasing interest in rethinking the notion of authorship in the field of literary studies, particularly since the emergence of new media has altered the meaning and boundaries of the “author” as a stable and unified origin of the text. My paper considers the rich history of translation in modern Japan and explores the dynamics of authorship and the canon in this new anthology project, while focusing particularly on Kawakami Mieko’s rendition of Higuchi Ichiyo’s “Takekurabe,” which marks the final translated work

in the anthology. How does the placement of Higuchi Ichiyo as the threshold between the premodern and the modern reinforce the linguistic distance that was crucial to her canonization as the representative Meiji woman writer, and how is her work “updated” to make it attractive and relevant in contemporary times? How does the anthology establish, reconfigure, or subvert the existing canon(s) of Japanese literature, and what are the gender dynamics in the inclusion of women writers and translators? How does the anthology imagine “Japan” and “Japanese language” in the 21st century?

“Gender and genre in the crafting of authorial personae in early Shōwa Japan”

Joanna Sturiano, Bates College

In the early Shōwa period, women writers were often classified as authors on the basis of their gender, no matter how disparate their writing styles or chosen genres. Yet by shaping their authorial personae in a variety of ways, they carved out spaces for themselves as professional writers and for their works to receive broader recognition than such classification allowed. My paper examines the genre fiction of two writers, Hirabayashi Taiko (1905-1972) and Tsuboi Sakae (1899-1967), whose literary debuts took place within the context of the Japanese proletarian literature movement of the late 1920s. In Tsuboi’s case, her children’s literature became the writing for which she was best known at the close of her long career. In contrast, Hirabayashi’s most acclaimed works of genre fiction -- in the genres of detective fiction, “poison woman” stories, and gangster fiction -- comprised but a subset of her wide literary output aside from proletarian literature. I present readings of Tsuboi’s children’s literature and Hirabayashi’s gangster fiction attentive to how they fit into each author’s literary personae and body of work. With this analysis, I suggest ways in which these works of genre fiction can help present-day readers better understand the historical significance of these writers and the force of their literary innovations within the context of the gendered genre conventions of early Shōwa Japan.

“Translating gender in Natsume Sōseki’s *Meian*”

Kelly Hansen, Okayama University

This paper examines strategies for translating women’s speech in Natsume Sōseki’s unfinished novel *Meian* (Light and Darkness, 1916). Women’s language in Japan is a topic that has increasingly captured the attention of scholars. Distinct forms of personal pronouns, verbs, and emotive markers dictate that women use speech which is more polite and less assertive than that of men. Understanding the role of women’s language thus has implications for translators, teachers, and students of Japanese. However, a core theme running through many studies in recent years is how significantly gendered speech as a conceptual category can differ from the actual language that women use. Despite being published nearly a century ago, the language of *Meian* challenges many prescriptive rules for women’s speech still found in Japanese textbooks today. *Meian* is particularly suitable for a study of gendered language not only because it depicts a large number of women representing a range of social positions and ages, but also because of the many complex relationships and power conflicts that develop among the female characters. Most studies on women’s language contrast female speech patterns with those of men, a strategy that tends to focus on the general lack of assertiveness in women’s language. This study highlights variations in speech patterns among women themselves, which may differ according to age, social status, and relationship to addressee. Through analysis of markers of female speech (or lack thereof), I analyze strategies which women use, either to promote harmony and camaraderie, or to establish power and authority. Drawing on the two English translations of the novel, I then apply this to a literary analysis of the principle female characters, to illustrate how social acceptance for women is directly tied to each individual’s ability to conform to socio-political notions of correct speech.

“Lady Murasaki’s fans: Writing sexual violence in post-*Genji* women’s literature”

Otilia Milutin, Knox College

This paper examines representations of sexual violence in literary works written by court women between the late Heian and the late Kamakura periods (late eleventh to early fourteenth centuries). It analyzes a variety of literary works, including court tales, such as *Nezame at Night*, (*Yoru no nezame*, attributed to Fujiwara no Takasue’s Daughter, late 11th c.) and *The Changelings* (*Torikaebaya monogatari*, ca. 1100-1170), court diaries, such as *The Sarashina Diary* (*Sarashina nikki*, also by Takasue’s Daughter, ca. 1060) and *The Confessions of Lady Nijō* (*Towazugatari*, by Gofukakusa-in Nijō, ca. 1304-1307) and literary criticism, such as *An Un-named Tale* (*Mumyōzōshi*, by Fujiwara no Shunzei’s Daughter, ca. 1200-1201). By focusing on the detailed vocabulary and imagery of sexual violence in some of these texts and on the others’ readings of the their literary predecessor, the 1008 *Tale of Genji* (*Genji monogatari*, by Murasaki Shikibu), this paper argues that not only are these works some of the earliest examples of *Genji* reception in Japanese literature, but also that they display elements common to the contemporary phenomenon of fan fiction. These female authors, some known, some anonymous, actively engaged with Lady Murasaki’s tale in affirmative or transformative ways, commenting on episodes they particularly liked or disliked, rewriting endings they did not find satisfying, writing themselves into the text (an author-insert strategy known as “Mary Sue” in contemporary fandom communities) or creating new, unexplored relationships between *Genji*-inspired characters (“shippings” to nowadays fans). What this paper emphasizes, ultimately, is the existence of a strong community of female writers and readers in the centuries following Murasaki Shikibu’s *Tale of Genji*, a community of women deeply influenced by their literary predecessor in the way they read and understood court tale literature, but also in the manner in which they textually engaged with sexual violence.

SESSION 1-F: LINGUISTICS PAPERS [CHESTNUT EAST ROOM]

Chair: Yoshimi Sakakibara, University of Michigan

“Japanese *n deshita* in discourse: Past form of the *n desu* structure”

Hironori Nishi, University of Memphis

The Japanese sentential ending *n desu* structure is a heavily discussed topic in the field of Japanese linguistics. However, previous studies mostly focus on its present-tense form *n desu/da*, and the past-tense *n deshita/datta* has not been included in their scope. In addition, in the field of Japanese language pedagogy, explicit instruction on the usages of *n deshita/datta* is typically not included in the curriculum, even though the *n desu* structure itself is introduced in elementary-level courses. By examining a large linguistic corpus, the present study explores the usages of *n deshita/datta* used for past events and situations in discourse, and analyzes the factors that trigger the use of *n deshita/datta* in discourse. The findings of the present study show that out of the 167 cases of *n deshita/datta* used for past events and situations in the corpus, 63 cases (37.7%) co-occurred with grammatical elements that require past-tense connections for the preceding item such as the sentential ending particle *kke*, the *tara* structure, and the *tari* structure. For the cases of *n deshita/datta* that co-occurred with *kke*, *tara*, or *tari*, it was concluded that the grammatical restrictions arising from these elements triggered the occurrences of *n deshita/datta*. On the other hand, 104 cases (62.3%) occurred without being followed by any grammatical elements that require past-tense connections. These cases of *n deshita/datta* in the corpus were used to express the speaker's recollection of previously held knowledge, or as part of confirmation seeking utterances for previously held knowledge, especially when *n deshita/datta* was used with sentence-final *yo* or *yone*. The present study also includes several pedagogical suggestions for enhancing accurate use of *n deshita/datta* by learners of Japanese.

「アドバイスへのアドバイス—日本語話者はどうアドバイスを与えているのか—」 (Discourse analysis of giving advice in Japanese)

Yoshimi Sakakibara, University of Michigan

「どうしたんですか」「お金がないんです」「仕事をしたらどうですか」。これは「～たらどうですか」の宿題の答えである。「たらどうですか」は「提案・アドバイス」(なかま2)「アドバイス・勧め」(げんきII)と説明されるが、不自然な誤用が多い。本稿では、日本語話者のアドバイスを談話分析し、日本語教育への提言を行う。先行文献によると「たらどう」にはポライトネスが関わり(島1993)、提案(牧野・筒井1986)や、命令・許可等も表わす(元2010)。コロケーション解析では「たら+どう」は強い結びつきを示す(tスコア15.378、MIスコア5.09)ものの、「たらどうする」等が多く、「たら+どう+です」の場合、強い結びつきは認められない。また、話し言葉(名大コーパス)でも「たらどうですか」は提案に使用されていた。では、いわゆる「アドバイス」はどう行われるのか。談話分析には①話し言葉(名大コーパス等)②新聞の人生相談③Yahoo知恵袋の回答(67件)④ツイッターを用いた。③と④はアドバイスを求める件を抽出した(方法は割愛)。その結果、前置きには共感や自らの体験談、終結部には励ましやお祈りが多く、時折、質問や確認もされることから、助言には同情や理解を示すことが大切だと分かった。また、具体案の提示は「たらどう」より「てください」「ましよう」「たほうがいい」の方が多かった。さらにツイッターでは命令形や普通形が多用され、ポライトネスの概念はない一方、共感や体験談は同じく多く表明されていた。従って、日本語教育では表現ではなく、談話レベルで場面による適切な表現の選択や、共感の表明の重要性を教えるべきである。

“Style shifting to non-honorific forms in Japanese TV cooking shows”

Heeyeong Jung, Harvard University

The honorific forms of Japanese language are linguistically encoded in speech styles, mainly reflected in predicates. Recent empirical data-based studies regarding style mixtures in various contexts pointed out that the dichotomous view on the usage of honorific forms versus plain forms cannot give a full account for flexible and intermixed usage of non-honorific forms in naturally occurring spoken data (Cook, 1998, 2008a, 2008b; Geyer, 2008; Ikuta, 2008; Masuda, 2016; Maynard, 2008; Okamoto, 1998, 2011; Saito, 2010, 2011). This study examines style shifts to non-honorific plain forms occurring in host-chef interactions in Japanese TV cooking show, *Kyoo no ryoori*. Expectedly, the quantitative analysis reveals that *desu/masu* is the default ending form dominantly used by interlocutors. On the other hand, style shifts to the plain form often occurred 1) when host summarizes chef's comments 2) when host conducts evaluative remarks on food, 3) when chef demonstrates his professional knowledge on cooking, and 4) when host/chef gives a soliloquy remark. The qualitative analysis on the style shifts to non-honorific forms from the perspective of constructivist discourse theory supports the idea that marked non-honorific forms do not signify the loss of politeness of the speaker toward the addressee but carry out specific functions in order to achieve various indexical meanings.

“Rethinking 'exaptation' in the formation of the Japanese conjunctive particle *si*”

Frederick Bowman, The Ohio State University

Japanese data have been prominent in recent discussions of 'exaptation' – a process by which 'obsolescent' or 'junk' morphology is re-purposed to some new use (Lass 1990) – which has recently received renewed attention from historical linguists (e.g. Norde and Van de Velde 2016). This paper assesses Narrog's presentation (in Norde/Van de Velde 2016) of purported cases of exaptation in Japanese, in particular the formation of the conjunctive particle *si* 'and...' in the Late Middle Japanese (LMJ) and Early Modern Japanese periods (16th-early 17th c.). *Si* (as in *oisii si*, *yasui si* 'it's delicious and cheap') is widely acknowledged to derive from a bound inflectional morpheme: the Middle Japanese conclusive form *-si*, which occurred after adjectival roots (e.g. *aka-si* 'is red'). It then gained free-word status as a particle and came to occur after other word classes (e.g. verbs). This appears to be a prototypical case of exaptation: after the conclusive-adnominal merger (Frellesvig 2010), *-si* becomes obsolete as an inflectional morpheme and is re-purposed as the free particle *si* (Narrog 2016). However, a closer look at *-si* and its place in LMJ complicates matters. As Narrog mentions, LMJ conclusive *-si* was still productive as a clause connecting morpheme (Suzuki 1990), and was even innovatively used after the conclusive of so-called *-siku* adjectives: this casts doubt on *-si*'s obsolescent status. Furthermore, as Suzuki has argued, the earliest attestations of particle *si* occur after the LMJ future negative *-mai* and its positive counterpart *-yoo*, suggesting a highly localized innovation that subsequently becomes generalized throughout the verb system. I therefore conclude that the case of *si* is not one of exaptation, and further

that it lends support to the thesis (Joseph 2016) that 'exaptation' itself is epiphenomenal. The history of this comparatively marginal construction in LMJ is thus illuminating for broader issues in historical linguistics.

10:20 a.m.–12:00 p.m. — Session 2

SESSION 2-A: PEDAGOGY PAPERS [PINE EAST ROOM]

Chair: Michiko Kaneyasu, University of Colorado, Boulder

"Foreign accent in L2 Japanese and pronunciation teaching"

Kaori Idemaru, University of Oregon; **Nobuaki Minematsu**, University of Tokyo

What does it mean when we say someone has a foreign accent? Are we noticing something in the pronunciation of certain vowels or consonants? Or are we influenced by the way speech rhythm or intonation is slightly "off?" Understanding the nature of foreign accents is important because the perception of an accent can lead listeners to think that the speaker is not understandable or not to be trusted, even when the message is accurately conveyed (Derwing & Munro 1997, Lev-Ari & Keysar 2010). The first part of this presentation reports two studies that investigated acoustic sources of foreign accent in Japanese, one using manipulated Japanese utterances and the other using L2 learners' Japanese utterances (16 native Mandarin speakers and 16 native English speakers). Rating of these utterances by native Japanese listeners indicated that pitch accent plays a very important role in perceived foreign accent in Japanese. It outweighed factors such as consonant and vowel pronunciation. Furthermore, learners with four years of classroom instruction did not outperform learners with two years of classroom instruction. Given these research findings, the second part of the presentation discusses basics of Japanese pitch-accent patterns as well as the frequent L2 learner errors that we found in our data. In addition, we present a demonstration of the Online Japanese Accent Dictionary (OJAD) (Minematsu, 2014), which includes functionalities that (a) visually display pitch patterns and (b) provide audio files created through Text-to-Speech technology for texts that users input on the site. There are numerous cautionary reports that pronunciation is marginalized or neglected in both foreign language research and instruction (e.g., Derwing & Munro, 2005; Szpyra-Kozłowska, 2015). The aim of this presentation is to provide important rationales for pronunciation teaching as well as background knowledge and tools that would aid instruction.

「学生主導キャンパス日本語ラジオ配信の試みと学習者の実践共同体の形成/未形成の状況」 (Student-led trials with on-campus Japanese radio streaming: an observation on building of communities of practice among Japanese language learners)

Kiyomi Kawakami, University of Iowa

本発表は、アメリカ中西部の大学における学生主導のキャンパス日本語ラジオ番組配信の試みの軌跡と、番組を取り巻く学習者の実践共同体(= community of practice)(佐藤&熊谷 2011; Lave & Wenger 1991ほか)の形成状況についての報告である。「日本語で元気を送るラジオ」という副題をもつこのキャンパス日本語ラジオは、2016年2月から週一回、YouTube上での配信という形で、学習者達が立案から番組の構成、スクリプト作成、撮影および編集、そして実際の番組配信まで一貫して行うという形態で配信されている。筆者は2016年年頭の番組の立ち上げ時から、企画者の学生達からしばしば相談を受けるという形で、教師が直接介入していないこの学習者主導の試みに関わってきた。いわば外部協力者としての関わりを通して観察可能となったのは、当初予想された日本語ラジオ番組配信による学習者の実践共同体形成が、現時点ではそれほど進んでいないということである。その現況について考察するため、本発表では、1) 番組の構成、2) 使用言語の難易度、3) 視聴者と発信者という三つの観点から、この学習者主導のラジオ番組の特徴およびその変遷を報告する。日本語ラジオ番組を媒介とする実践共同体形成の過程は、視聴者および発信者としての学習者と番組との関わり方の変化であり、ひいてはそれが言語学習の機会となり得ることについても考察する。また、学習者主導の教室外活動について、教師が「社会文化的視点からの観察」を行うことにより、実践共同体の自然発生的形成を長期的にサポートするという可能性についても、議論したい。

「初級教科書「げんき」にTask-based approachを取り入れたカリキュラム構築に向けて」 (Implementing a task-based approach to "Genki" elementary Japanese courses)

Yoko Sakurai, Japan Foundation, New York; **Mako Nozu**, University of South Florida; **Eiko Williams**, University of Miami

日本語教師の大多数がコミュニケーション重視の教育実践を心がけていることには疑問の余地がない。しかし、當作(2011)らが指摘するように、文型積み上げ型の教科書に則った指導を続けているために、実際には文型の強い制約を受け、現実場面を反映した言語活動が実現できないという問題もあるのではないだろうか。この原因は「提示された文型を使って何らかの言語活動をする」という後付けの発想をしていることにはほかならない。こういった現状の打開策としてフロリダ日本語教師会(AFTJ)の5大学の教師が協働し、初級教科書「げんきI」のCan-doリストを独自に作成してTask-based approachを取り入れたカリキュラムに再構築するアーティキュレーションプロジェクトを立ち上げた。瀬尾(2010)は、文型習得以上に学習者が「日本語で何かができるようになった」と実感できることが重要であるとし、その促進のためにTask-based approachが有効だと提言している。「できる」を可視化するものとしてCan-doリストの援用は最適と言えるだろう。プロジェクトでは、文型の土台の上にコミュニケーションがあるという後付けの考えからの脱却を目指し、「学習者が遭遇しそうな日本語使用場面と、そこで起こるであろう言語活動」をまず想定して、そこからそれぞれの言語活動を達成するために学習すべき項目を逆算して考える、バックワードデザインの理論を極力取り入れるようにした。本発表ではAFTJが「げんきI」にTask-based approachを取り入れた試みの過程とその成果、及び今後の課題について述べる。

“Differentiated instruction in university: A case study of an advanced foreign language course”

Michiko Kaneyasu, University of Colorado, Boulder

A major challenge teachers face in advanced foreign language courses is that students come from diverse backgrounds (e.g., heritage speakers, those who have just returned from study abroad programs, those who have just completed a pre-requisite course with various levels of mastery, those who were placed in the course by placement test), and their proficiency levels as well as areas of strengths and weaknesses differ greatly even before the courses begin. A single activity or assignment may be too easy for some students, just right for others, and too difficult for still others. Both higher education and second language acquisition (SLA) research have long recognized individual differences as one of the most important factors that affect the rate and degree of success in classroom learning (e.g., Tarone & Yule 1989, Cook 2008, Ambrose et al. 2010). However, in a majority of college classes, this understanding has not been applied to actual teaching practices due to limited time, resources, and possibly out of concerns for fairness. Another common finding from research on college learning and SLA is that learners benefit most when they are given appropriate level of challenge. In order to do this, instructors must have a clear idea of what prior knowledge and skills students bring and continue to assess and respond to their readiness and progress. The present study looks at dynamic and systematic ways of differentiation that can be incorporated across disciplines, with the goal of fostering development in individual students and helping them become self-directed, life-long learners. In this presentation, I will present findings from an exploratory case study of college-level differentiated instruction in a 4th-year advanced Japanese language course, and explore differentiation strategies aimed to develop students' proficiency as well as their awareness and control of their own learning.

SESSION 2-B: SECOND LANGUAGE ACQUISITION PAPERS [CEDAR ROOM]

Chair: Mariko Wei, Purdue University

“Beyond decoding: Reading interventions for English-Japanese bilingual adolescents with autism spectrum disorder”

Mariko Wei, Purdue University

Diagnoses of Autism Spectrum Disorder (ASD) have soared to as many as one in every 68 children in the United States (Centers for Disease Control and Prevention in 2014). As a result, more students with ASD are being included in the general education setting, and teachers are faced with a daunting task of understanding their special needs and determining strategies that will help them succeed in the classroom. Among all the linguistic impairments, reading comprehension is especially difficult for individuals with ASD. They generally demonstrate well-developed word recognition skills and syntactic knowledge, but their reading comprehension is severely impaired because they have difficulty shifting their attention from word-level reading to text comprehension (Nation et al., 2006). Compared to their decoding skills, other necessary skills for reading such as text integration, metacognitive monitoring, and inference making are severely under developed. The present study examined possible effects of three instructional techniques on reading comprehension skill of English-Japanese bilingual adolescents with ASD. 30 subjects participated in the study: 15 English-Japanese bilingual adolescents with ASD, and 15 English-Japanese bilingual adolescents without ASD. The subjects read eight texts written in Japanese under four conditions: filling out graphic organizers, answering sentence-by-sentence comprehension questions, making predictions and inferences, and control (reading only). All the texts were approximately 800 characters in length and were at the same level of difficulty. A repeated measures analysis of variance indicated that conditions differed significantly in their effects of reading comprehension, but all three reading instructional interventions had significant effects on the subjects without ASD. However, concerning the subjects with ASD, only the conditions with graphic organizers and sentence-by-sentence comprehension questions had significant impacts on improving their reading comprehension. Pedagogical implications for text preparation and remedial instruction for Japanese learners with diverse needs and particular cognitive processes will be discussed.

“Perceptual differences with regard to kanji instruction between teachers of Japanese with different cultural and educational backgrounds”

Yoshiko Mori, Georgetown University

A growing number of studies have shown that individuals with different cultural and educational backgrounds perceive language learning differently, and that teacher perceptions significantly influence their use of instructional strategies. Research in second language vocabulary development has also demonstrated that students' word learning strategies reflect the types of instruction they receive. Drawing upon these lines of research, this study investigated perceptual differences with regard to kanji instruction between native and non-native teachers of Japanese, and between secondary school teachers and college instructors. 199 K-16 teachers of Japanese (166 natives and 33 non-natives; 83 secondary school teachers and 116 college instructors) in the United States completed a 62-item kanji questionnaire eliciting their views on the nature of kanji learning and the effectiveness of kanji teaching strategies. An exploratory factor analysis identified attitudinal and strategic constructs comparable to those reported by previous kanji belief studies: cultural value, usefulness, difficulty, pleasure, the future of kanji, and aptitudes as attitudinal factors, and memory strategies, context-based strategies, confidence, sound strategies, morphological analysis, metacognitive strategies, and rote memorization as self-reported kanji teaching strategies. Overall, teachers of Japanese exhibited strong beliefs in the usefulness and difficulty of kanji and the effectiveness of rote memorization, memory- and metacognitive strategies. However, mean comparisons revealed that non-native instructors showed stronger beliefs in the effectiveness of sound-, memory-, and context-based strategies than native teachers, and that secondary school teachers exhibited stronger beliefs in cultural value and the effectiveness of memory strategies than college instructors who considered rote memorization most effective. Together with the finding that beliefs in the cultural value and usefulness of kanji were associated with a variety of instructional strategies, teachers of Japanese with different cultural backgrounds and in different educational contexts use different kanji teaching strategies, which may reflect their different views on language learning and instruction.

“Acquisition of Japanese lexicalization patterns of motion events by advanced-level English-speaking learners of Japanese”

Saori Nozaki, The Ohio State University

Talmy (1985, 2000) proposed that world languages can be roughly grouped into two types; Satellite-framed languages (S-languages) and Verb-framed languages (V-languages) according to what semantic component (e.g., Path (path of motion), Manner (manner of motion)) is allocated what part of surface linguistic form. For example, S-languages (e.g., English) often encode Path with what Talmy calls Satellite (e.g., English preposition ‘into’) and conflate Manner with their main verbs (e.g., Mary walked into the room.). On the other hand, V-framed languages (e.g., Japanese, Spanish) often encode Path with their main verbs and express Manner outside of their main verbs or often omit it (e.g., *Meari ga (aruite) heya ni haitta*. ‘Mary entered the room (by walking).’). Talmy’s S/V typology has also been applied in second language (L2) acquisition studies, and Slobin’s (1996) Thinking-for-speaking (TFS) Hypothesis is popularly employed to explain how learners acquire their target language’s lexicalization patterns of motion events. The current study shows how unique Japanese lexicalization patterns of motion events are, and investigates how advanced-level English-speaking Japanese as a foreign language (JFL) learners acquire Japanese TFS. The data are collected from four subject groups (20 native speakers (NSs) of English, 20 NSs of Spanish, 20 NSs of Japanese, and 20 advanced-level English-speaking JFL learners) via questionnaire where subjects see pictures of various motion events and write their descriptions in designated languages (English NSs: English, Spanish NSs in Spanish, Japanese NSs and JFL learners: Japanese). Collected data are coded and analyzed both quantitatively and qualitatively. The results indicate that the majority of advanced-level JFL learners seem to have acquired Japanese TFS mostly, however, some learners still have difficulty in describing boundary-crossing motion events or using manner verbs (e.g., ‘roll’) with goal prepositional/postpositional phrases (e.g., ‘to’). With the common learners’ incorrect answers, pedagogical implications are also discussed.

“A quantitative approach to Japanese passives in learner production”

Sanako Mitsugi, University of Kansas

Researchers with formal approaches consider the linguistic properties associated with Japanese direct passives and indirect passives as distinct (Kuno, 1973), even though the surface passive affix, -(r)are is shared. This view however, does not sufficiently characterize how these different types of passives are learned. Building on the usage-based proposals (Goldberg, 2006), this study examines the use of passives by second language (L2) learners of Japanese and native Japanese speakers. Specifically, the study examined passives sampled from a L2 corpus (the KY corpus; Kamada, 2006) and a native speaker baseline corpus with respect to construction frequency, function, and prototypicality. Wherever was necessary, statistical tests were performed using the log-likelihood G-test with frequency profiling. The results show that native speakers and the L2 learners encode various linguistic elements as the passive subject; this effect is not limited to the direct object in the active counterpart. Furthermore, the L2 learners with advanced- and superior-level proficiency produced as many passives as did the native Japanese speakers. More important, the distributions of the verbs used in the passives, both those produced by the native speakers and those of the L2 learners form a Zipfian-type distribution (Zipf, 1935), suggesting the schematicity of Japanese passives. Some of the most frequent verbs can be seen as canonical transitives, but there were surprisingly large numbers of psychological-experience verbs (e.g., iu ‘say’, omou ‘feel’), which do not necessarily demonstrate a high degree of transitivity according to traditional criteria (Hopper & Thompson, 1980). These passives involving experience verbs will further be discussed in light of agentivity and perspectives. The overall pattern of results underscores the important role that the verb frequency distribution plays in L2 production of syntactically complex structures and shed lights on L2 learning being driven by prototypical instances.

SESSION 2-C: SIG-FOCUSED PAPERS (CLASSICAL JAPANESE, TRANSLATION, LANGUAGE & CULTURE) [LINDEN ROOM]

Chair: Kazue Masuyama, California State University, Sacramento

“Japanese particle *i*: A study in early middle Japanese” [Classical Japanese SIG]

John Bundschuh, The Ohio State University

The semantic nuances of early Japanese particle *i* remain contested in Japanese historical linguistics. It is most often described in the *kokugogaku* tradition as an ‘emphatic’ particle, but has also been analyzed as an accusative marker (Miller 1989), active marker (Vovin 1997), nominalizing suffix (Hirata 2001), nominative marker (Kasuga 1985, Frellesvig 2010), demonstrative pronoun (Itabashi 1999), and a quasi-free noun meaning ‘person’ or ‘thing’ (Martin 1987). The final four interpretations reflect its potential relation to Middle Korean *i* (Itabashi 1999). However, the above researchers draw their conclusions from particle *i*’s quite limited use in Old Japanese (OJ), since its use was thereafter restricted to kundokugo, the linguistic variety used in Japanese renderings of Chinese texts. This study examines the use of *i* in both Old Japanese (OJ) and Early Middle Japanese (EMJ) sources: namely, its 6 tokens in the Man’yōshū, a collection of OJ poetry, the 12 in the *senmyō* (OJ imperial edicts), and the approximately 300 in the EMJ rendering of the *Saidaiji-bon Konkōmyō saishō’ōkyō*, one of the earliest extant annotations of the Golden Light Sutra in Japanese. It finds the most likely candidates for *i*-marking to be non-singular noun phrases, including some containing a series of specific referents, each connected by comitative particle *to*, previously introduced discourse referents, and relative clauses. It concludes that the ‘emphasis’ that has often been noted of particle *i* can be attributed to its being a resumptive pronoun used to increase the specificity and referentiality of the marked noun phrase, which supports the argument for it being cognate with Middle Korean *i*. This research both furthers our diachronic understanding of particle *i* and advocates more detailed linguistic research into EMJ *kundokugo* texts.

“Life history of an *issei* woman: Translation of daily diaries from World War II (1941-1946)”

[Translating/Interpreting SIG]

Kazue Masuyama, California State University, Sacramento

This presentation aims to the public's understanding of the humanities through a unique and unheard voice of a Japanese immigrant *issei* woman, Kikuyo Nakatani (1903-1990) who lost her home, strawberry business, and her beloved son during World War II, but overcame post-war struggles of poverty and discrimination. This presentation will be the first time to introduce her life history through her diaries during the war (1941-1946). The diary is part of an impressive collection of documents donated to a university in California in 2005. This presentation describes Kikuyo's turbulent life after the attack on Pearl Harbor, daily living in the Tule Lake and Minidoka Relocation Centers, and deep grief of the death of her oldest son, Kunio, who went to Japan for his college education. Once the war began, the Japanese military assigned Kunio to the famous battleship, Yamato, where he served as a translator and decoder. Sadly, Kunio died on the battleship in 1945. Mitsuru Yoshida (1967, 1985, 1994, 2005), one of the survivors of Yamato, recorded Kunio's last days. The presenter also discusses unique challenges to translate handwritten, historical and personal accounts. These diaries, written in unique semi-cursive style, use some characters and expressions that are no longer in use or only used locally and temporarily. Because it is a personal account, it involves various names and places, emotions and thoughts. It took more than five years to transcribe these diaries into readable Japanese, translate them into English, and annotate cultural and historical information. These well-preserved diaries are a rare find and a rare opportunity to examine the experiences before, during, and after World War II of an *issei* woman. Her unheard voice provides a basis for the exploration of significant events and themes in our nation's history and that advance knowledge of the principles that define America.

“Star Wars’ mirrored dichotomies: Teaching gendered language constructs through film translation” [Language & Culture SIG]

Caleb Boteilho, South Kitsap High School, WA

This paper explores the representation of "gendered" language between the characters Rey & Finn from the film *Star Wars: The Force Awakens* (2015). Japanese is commonly taught as having gender-specific language, from pronouns to conjugations. However there is little evidence for this distinction outside of common patriarchal domination; nothing in the word 「俺」 that denotes a male speaker besides the fact that a larger number of users are male. Neither is 「退いてください」 more feminine or masculine than 「退け」, only more rude and more polite. The translation of English dialogue into Japanese subtitles manifests the perceptions of gender within these linguistic phrases, evidencing an inequitable distinction & representation of character. With this film as a model there will be a discussion of social responsibility from both the film's origin and the Japanese audience. Through this, we will see that gender biased language is based on nothing more than manufactured cultural constructions.

“Shin Godzilla for teaching Japan” [Language & Culture SIG]

Hisaaki Wake, Amherst College

The recent popular movie *Shin Godzilla* (2016) provides with very good teaching materials in Japanese culture and language courses because of its post-modern approach to contemporary Japanese society and culture. The directors Anno Hideaki (*Evangelion*) and Higuchi Shinji intentionally chose popular cultural elements that are very likely to inspire the audience's memories and gave unity and order to the assemblage of these elements based on a consistent principle for appealing to the post-Fukushima anxiety against invisible nuclear threats. In this way, they are successful in developing an original work of art by assembling stereotyped elements. For this reason, instructors of Japanese culture and language do not have any trouble finding a sequence to help students improve their understanding of Japan—stereotyped cultural elements with an artistic, ironical twist. The basic premise of the story is the battles against the mysterious monster named Godzilla apparently equipped with an organism incessantly evolving as a nuclear reactor. During these battles, politicians and bureaucrats confront with the restriction imposed by the Japanese legal system and the US-Japan Security Treaties. Therefore, the instructor can explain about various political and legal aspects of contemporary Japan by taking vivid examples from the movie—not only citing discourses and voices particular to Japanese people in power but also juxtaposing actors side by side with real politicians who are indeed active in today's Japanese politics. Students would notice that some characters look very similar to Koike Yuriko, Governor of Tokyo, and Miyazaki Hayao, widely known anime director. Typical voices and wordings of the *otaku* are also conveniently sampled in a positive manner—because they are the persons who most contribute to the victory against the creature—and may serve as good linguistic materials for class discussions about Japanese language and culture.

SESSION 2-D: LANGUAGE AND TECHNOLOGY PAPERS [PINE WEST ROOM]

Chair: Nobuko Chikamatsu, DePaul University

「日本語初中級コースにおけるハイブリッド化とフリップクラスの導入」 (Hybrid and flipped Japanese courses: An attempt in 1st and 2nd year language curriculum)

Nobuko Chikamatsu and Mika Obana, DePaul University

デジタルネイティブ（世代）が大学生の主流となった今、大学教育は益々オンライン化されており、オンラインコース、または、通常の教室での授業とオンライン学習を合わせたブレンド（ハイブリッド）コースが盛んに開講されている。言語教育も例外ではなく、当大学では2015～2016年度に初中級（1～2年生レベル）の全ての言語コースがブレンドコースに変わった。日本語初中級コースもこれまでの週三回四時間半の授業体制から、週二回の計三時間に削減されたため、全コース内容の3分の1をオンライン化し、学習者の自律学習に頼ることになった。本稿ではこの新しいブレンドコースの概要とそれがカリキュラムや学習者に及ぼす影響について、以下の点から報告・考察する。① 新コースの概

要：『げんき1・2』の教科書を使ったブレンドコースのカリキュラム、オンラインモジュール・教材の開発（例：文法ビデオ、単語・漢字練習とテスト、読解練習）、フリップクラスの導入（例：文法の自主学習とクラスでの練習）についての解説 ② 登録者数の変化：過去3年の日本語コース登録者数の学期・年度ごとの変化とハイブリッド化の関連の調査、及びハイブリッド化による学習者の継続性の推移の報告 ③ 履修者の意識調査：学習者のオンライン学習への取り組みの意識調査（サーベイ）を基に、ハイブリッド化の成果と問題点（例：何が・誰がオンライン化に向いているのか、いないのか）、レベル別での比較、通常コースとブレンドコースの比較（2年生は前年に通常コースを履修）、また教師と学習者の意識のずれ、等を考察 最後に①～③を踏まえて、ハイブリッド化における今後への課題と対策を提言する。

「反転授業のための『げんきI・II』講義ビデオの開発と運用」 (Development and operation of lecture videos for Genki textbooks)
Yoshie Kadowaki and Sayumi Suzuki, University of Nevada, Reno

ブレンド型学習の一形態である反転授業は、近年様々な教育現場において取り入れられ始めている。日本語教育においても関心が高まっているが、大学での使用に適した教材は少ないのが現状であり、導入にあたっては、必要となる講義ビデオの作成が教師にとって大きな負担となるため、なかなか踏み切れないという声も聞かれる。ネバダ大学リノ校では2014年春に反転授業のための教材開発を始め、2015年秋学期からそれらを用いた反転授業を実施している。授業前に視聴する講義ビデオは文法項目の説明を目的としており、教科書『げんきI・II』に準拠した内容になっている。教材の特徴として、ビデオ内に練習問題が含まれているため、学習者が講義内容の理解度を自身で確認できること、また、ビデオ視聴後には大学のLearning Management Systemと連動したオンラインクイズが受けられるため、学生がビデオを見ずに授業に来るといった事態を防ぐ、といったことが挙げられる。また学生からは、自身の理解度に合った速さで、且つ何度もビデオを見られる点などから好評を得ており、教師としても、今まで講義に充てていた時間を他の活動に使えることや授業内での英語使用が大幅に減っていることから、手応えを感じている。本発表では、教材の特徴や2年分の学生のアンケート結果を紹介し、反転授業の導入によって授業をより有益なものにできることを提示したい。また、「げんき」を使用している他機関のプログラムでも大きなカリキュラム変更を必要とせず実施ができるよう、実践する際の教室活動のデザインについて提案する。

「デジタルテクノロジーを用いた実践的教材の活用と多様な評価者：遠隔地の教師とテクノロジーでつながる小規模校の試み」 (Use of practical teaching materials, digital technologies, and diverse evaluators: A trial to connect with an instructor remotely via technology at a small college)
Noriko Sugimori, Kalamazoo College; Soichiro Motohashi, Western Carolina University

学期末の口頭発表など成績への影響が大きい主観テストの評価をより公平にするために、複数の評定者が判定することの重要性が指摘されている（近藤ブラウン 2012）が、現実的には教員数自体が少ない小規模大学では、その実施は困難であることも多い。しかしビデオチャットツールの発達は物理的に離れている評定者に、評定に参加してもらうことを可能にする。コミュニケーション型教授法に有効な新しいテクノロジーが開発され成果をあげている（Aikawa 2014, 池田・深田 2012）が、既存のテクノロジーをどう教育に生かすか探ることも重要である。そこで本発表では、大学2年の日本語クラスにおける、1年目のクラス後に転勤した元担当教師（以下教師A）への贈り物を日本の電子商取引サイトで選び、そのプロセスを含め発表するというグループプロジェクトの実践を報告する。このプロジェクトの中で学生は、(1)教師Aについての情報をSNSで調べてその嗜好を探り、(2)メールで質問をし、(3)予算内で何を贈るかを話しあい、(4)商品を選び、(5)何を選んだか、どうしてそれを選んだかを授業内で発表する。学生はほぼ全員が3年時に日本に留学するため、日本語でのコミュニケーションに慣れ親しんでおくことは、留学時の生活にも役立つと思われる。学生の授業内発表は、教師Aもビデオチャットで参加し、その様子を録画する。評定は、日本語クラス担当教員（筆者）と外国語教育法のトレーニングを受けている学生5名および教師Aで行う。発表した学生自身もお互いに自己についての評価を行う。教室内とビデオチャットツールによる評定者の評価結果の差異なども検証し発表する。

「Augmented realityを使った効果的な速読の指導」 (Incorporating augmented reality for more effective rapid reading instruction)
Satoru Ishikawa, Boston University; Kazuhiro Yonemoto, Tokyo Medical and Dental University

Augmented reality (AR; 拡張現実) とは、実際に世界に存在する事物に対して、情報技術を用い情報を付加することで生み出される環境である。近年では、博物館の展示などに利用され、その学習への応用も期待されている。本発表ではGPSゲームエディターであるARISを用い、ARを使った効果的な速読の指導法について検証する。読解能力の向上には、精読による文法や語彙の習得と同時に速読や多読を通じて、読解のスキーマやストラテジーを身につけることが重要であることが指摘されている（大塚2007）。また、ACTFLのガイドライン（2012）では、言語能力が高くなるにつれ、幅広い分野（学術・文芸関係など）の話題について理解及び発話できる能力が求められており、それらの語彙やコンテンツを教える必要性も示唆されている。しかし、読解の指導では紙媒体にのみ依存する傾向があり、授業が単調になりやすいと指摘されている（川村2007）。そのため、それらの指導目標をどのように授業内で達成していくかが課題となる。そこで、本研究では、速読指導の中にARのテクノロジーを利用しているARISを用いた活動を取り入れた。具体的には、学習者は教室外でARISを用いて、速読教材に関するcontent schemaを活性化させる作業を行い、その後、速読を行うという指導を試みた。指導では、ARISを用いた作業がある章とない章を準備し、アメリカと日本で約15週のコースに取り入れた。本発表では、ARISを用いた作業の有無が速読教材への理解に及ぼす影響を分析するとともに、学習者への事後アンケートと担当教師の内省を基に、ARを使った指導法と学習効果及び今後の課題について報告する。

SESSION 2-E: LITERATURE PAPERS [CHESTNUT WEST ROOM]

Chair: Kristin Sivak, University of Toronto

“Vernacular practices of folk heroes in Meiji Japan: The rhetoric of the Legend of Kintarō”

Wakako Suzuki, University of California, Los Angeles

This paper examines the national allegory of child heroes in Japanese folklore with a focus on the legend of Kintarō. This legend appeared repeatedly and in many places, as part of the vernacular practices in the Meiji period. The legend of Kintarō emerged in Japanese folklore before the medieval period under the influence of “The Tale of Shuten Dōji,” but Kintarō became a popular folk hero in many genres, including children’s books, national language textbooks, and Japanese songs during the late Meiji period. It also became Japanese national tradition to display a Kintarō doll on Boys’ Day (May 5), symbolizing parents’ wishes for their sons to grow up healthy and strong. Indeed, national projects used Kintarō’s image as a symbol of cultural capital in Meiji Japan. Like another famous folk hero, Momotarō, Kintarō was commandeered as a legendary patriotic hero to promote the ideology of *fukoku kyōhei* (Enrich the Country, Strengthen the Military) in its Meiji variations, mobilized by the first Sino Japanese war. However, the vernacularism of Kintarō indicates how his iconic image was often localized, and featured by different geographical settings, acting as a satire of power dynamics indicating the subversive function of vernacular practices against the operation of the state-apparatus. This paper thus demonstrates how various incarnations of Kintarō create a complex interplay between standardization and decentralization in Meiji vernacularism.

「安部公房初期作品研究—「弱者の物語」と「経験」をめぐって」(The “Narrative of the Oppressed” and “Experience”: A study of Kōbō Abe’s early works)

Xie Fang, Tokyo University of Foreign Studies

「経験」はロマン主義文学のキーワードとして、個人を重視する歴史的な文脈の中で長期間に亘って論じられてきた。しかし、終戦によって従来の構造が覆される中、神話や意識などの言葉で包括できる欧州中心文学の優位性が破壊され、文学は対立の解消を普遍的なテーマとして語るように変容し、作者の権力を剥奪することに成功した。しかしながら、作者と厳密にかかわる「経験」に対する研究が看過されるようになった。そうした中、本研究は作者の実体験の重要性を改めて喚起しようと考えている。「経験」の抹殺によって個人の存在が無視される中で、テキストを通してしか「経験」を認知できない知の枠組みへの再考は、作者の主体の復権を図ることではなく、読者の立場から焦点化された「現前」するテキストに対する、「不在」として認識されてきた作者の「経験」の顛覆だ、という新しい読みの構築と言える。従って、「経験」に執着する日本現代作家を検討することは、欧米中心文学に対する弱者文学の逆襲という重要な意義を持つ。本研究は作者の「経験」がテキストを通して言語的レベルで如何に表象されたかを明らかにするために、実体験が豊富な安部公房を研究対象に、彼の初期作品の中で反復して出現する満洲国、砂漠、村落、船舶、共同体と言った「弱者」の表象に視点を置き、そうした「物」が象徴する周縁的意味をテキストで確認した上、「言葉」でしか表せない作者の実体験と、「物」として認識されるテキストとの因果性を考察する。また、それと同時に、「不在」としての「経験」が「現前」するテキストへ投影されるプロセスにおいて、無意識に生まれた安部公房特有な「弱者」の表象を明確にしたい。

“Abe Kazushige’s Fiction and the Ethics of Hyperrealism: Surveillance, conspiracy, and Local Dialect”

Jason Herlands, Grand Valley State University

This paper examines how Abe Kazushige’s representations of hometown (*furusato*), local and geopolitical histories, visual motifs, and local dialect are interwoven to construct a hyperreal, post-ethical narrative. Transcription of Yamagata dialect, along with meticulous chronological and topographical verisimilitude, imbue Abe’s texts with an insider-outsider authority that make fictional references indistinguishable from factual ones, one characteristic of hyperreal fiction. From his 1990s debut to his latest work of fiction, Abe, a film school graduate, deploys video surveillance as a recurrent trope that portrays visual acts as proxies for knowledge and power. In this paper I argue that hyperreal narratives of surveillance implicate the voyeur-reader in the act of looking (reading), particularly when the fictionalized “footage” centers on female sexuality and victimization. In *Shinsemia* (2003), in particular, a web of surveillance is overlaid by a mosaic of conspiracies, so that truth becomes a fluid concept whereby evidence is mediated by unverifiable representations. The footage, and the act of viewing it, supply the only unassailable facts. Indeed, more than the “actual” filming of the scenes in question, the viewing of such footage is characterized as providing both vicarious pleasure and a confirmation that the images on the screen “actually” took place. Characters objecting to this kind of surveillance are critiqued for having viewed — and become aroused by — scenes of victimization, positioning the reader in an analogous, awkward position: if it is unethical for fictional characters to enjoy these videos, what are the implications for the reader’s *jouissance*? What, ultimately, is the role of ethics in hyperrealist fiction?

“Passing notes: The matter of Minè in Mishima Yukio’s *Spring Snow*”

Kristin Sivak, University of Toronto

In Mishima Yukio’s *Spring Snow* [*Haru no yuki*], which is primarily about the love affair between the son and daughter of two noble families, a second subplot affair between *linuma*, a page in the service of the Marquis’ son Kiyooki, and one of the younger maids in his household, Minè, represents a puzzling aside to the events of the rest of the novel. Through the machinations of her superiors, the maid Minè becomes the conduit and receptacle for the agonies and antagonisms of the men around her as she also absorbs them into herself and transmutes them, acting as alchemical agent even in her passivity and silence. On the surface, the illicit affair between the young maid and the page acts as a sort of trial run for the older maid Tadeshina’s orchestration of the central affair between Kiyooki and the young woman Satoko, but the phantasmic and semiotically-charged spaces in which it unfolds alter it qualitatively in a way that replaces desire with horror and prefigures the novel’s (and the Sea of Fertility tetralogy’s) themes of love, revenge—and the vicious, karmic cycles of both.

SESSION 2-F: LINGUISTICS PANEL [CHESTNUT EAST ROOM]

Chair: Mutsuko Endo Hudson, Michigan State University

Panel Title: 「日本語文法の諸相：言語教育との関連において」 (Aspects of Japanese Grammar: With Reference to Language Instruction)

Panel Abstract: 日本語文法の研究は長い歴史を持ち、内容、焦点、方法論など多岐に渡る。理論的枠組みも国語学の伝統を受け継ぐものから現代言語学に準拠するものまで様々である。本パネルでは、形態論、意味論、語用論、品詞論の研究を紹介する。文法の諸相を異なる切り口で取り上げ、各々、言語教育面からの提案をする。発表1：接尾辞タチは従来、名詞の複数形を示し、ヒトや動物等に付くと言われてきたが、近年では擬人化されたモノや概念に付く例も観察される。発表では「名詞+タチ」がspecificityを表すと分析する利点を述べるとともに、教科書のタチの説明、韓国語の対応表現との相違に起因する学習者の誤用に触れる。発表2：「動詞+テイル」が「結果」「進行中」のどちらの意味になるかは、自・他動詞、意思の有無によっては説明できない。実際には、内在的・外在的エネルギーによって起こる現象は、動詞の自他を問わず、「進行中」になる。この種の説明は教育現場でも役に立つと思われる。発表3：ツモリを、「意志」を表す1種（例「行くつもりだ」）と「個人的見解」を表す2種（例「知っているつもりだ」）に分類する。1種は自然会話、コーパス等では使用が限られている。2種はヘッジの機能を持ちポライトネスに関係する。1種は初級で導入されるが、学習者が多用せぬよう指導する必要がある。発表4：日本語学習における品詞情報の必要性、利用法を具体例で示す。また、従来、品詞記述が不明確、あるいは不備な語彙項目を吟味し、全ての語彙項目を系統的に品詞分類する基準を提案する。適切かつ統一的な品詞表示は日本語の仕組みを学習者に理解させる助けになる。

「日本語の複数マーカー「たち」に関する一考察」 (Japanese plural marker '-tachi')

Kiri Lee, Lehigh University

一般的に日本語や韓国語のように助数詞を有する言語は名詞の単数形と複数形の区別がないとされるが、複数マーカーとして日本語には接尾辞の「たち」、韓国語には 'tul' が存在する。韓国語の 'tul' は近年文法化の傾向が見られるが、日本語では文法化には至っていない。そのためか北米で広く使用されている日本語の教科書にはあまり詳しい「たち」の記述は見られない。本発表では「たち」の用法を接続する名詞の種類などより考察し、日本語の教育、とりわけ韓国語話者の日本語の作文における「たち」の多用の理由についての参考情報として提供したい。「たち」についての先行文献では、名詞の複数形として「たち」が用いられる場合、その名詞は「有標」として解釈されることが観察されている (e.g. Kurafuji 2003, Nakanishi & Tomioka 2004, Lee et al forthcoming)。つまり「子供たちはもう寝ている」という文の「子供たち」は無標の一般的な複数の子供ではなく、話者が特定できる有標の複数の「子供」であるという観察である。本発表ではこの「有標」解釈が 'Definite' ではなく 'Specific' であることを示し、この 'Specificity' の解釈が、例えば「田中さんたちは「田中さんとその他の人」のような 'Associative Reading' と呼ばれる日本語特有の用法に大きく関わっていることを主張する。さらに、これまでは「たち」は人間や動物などの生物だけに使用できると言われて来たが、無生物にもその使用が広がっていること (Makino 2007) にも言及する。

「「進行中」か「結果の継続」か：エネルギー導入理論に基づくテイルの機能の明確化」 ("On-going" or "Resultative"?: An attempt to clarify the functions of -te iru)

Yuki Johnson, Johns Hopkins University

動詞+テイルは、進行中か結果の意味、または結果の意味のみを表す。しかし、学習者は「リスが死んでいる」などを "A squirrel is dying" と誤って理解することが多い。どの動詞が両方の意味を表せ、どの動詞が結果のみを表すかに関しては明確な理論はまだ明示されていない。本発表では Comrie (1986) のエネルギー・インプット理論に基づく分析により解明を試みる。日本語におけるアスペクトの研究は金田一 (1976) のテイル形の意味の相違による動詞の4分類に始まるが、それは出来事の実現までにどのくらいの時間を要するかという点に依存しすぎていると批判されてきた。奥田 (1984) はテイル文の意味には自・他動詞の区別が大きく関与すると述べたが、「飛行機は空港に着いている (自動詞)」は結果の意味しか表し得ないということは説明できても、「機械は今温まっている (自動詞)」や「風が吹いている (自動詞)」(進行中) などには当てはまらない。このように、従来の研究では多くの例外が出る。Comrie (1986) では有生物の意思操作が考察対象となっているため、なぜ無意思動詞のテイル形 (例「機械は今温まっている」) が進行中を表しうるかを包括的に扱えなかった。そこで、意思操作限定の枠組みを外し、自然界のすべてのエネルギーへと枠組みを広げた。これにより、内在的・外在的エネルギーが繰り返し対象物に導入される場合は、自動詞でも進行中の意味を表せると言えるようになる。この理論は学習者のテイル文の理解を助けるだけでなく、どのような点で英語の進行形 "ing" と異なるかを理解させるのにも効果的で、日本語教育に役立つと考える。

「「つもり」の使用実態とその教育」 (Tsumori: The gap between its actual usage and instruction)

Mutsuko Endo Hudson, Michigan State University

話し手の意志を表す形式には、動作動詞の非過去形 (スル)、意志形 (シヨウ)、非過去形+ツモリ (例：行くつもり) 等がある。ツモリはこの外、動作動詞過去形や状態動詞、形容詞に後続して「個人的見解」を表す (例：努力したつもり)。本発表では前者のツモリを1種、後者を2種と区別し、2種は「ヘッジ」を表すと考える。目的は、自然データ内のツモリの使用実態を検証し教育への示唆を得ることで、きっかけは学習者による1種の多用である。例：教師：頑張ってください。学生：? #はい、頑張るつもりです。このような返答が不自然なのは、ツモリは「前もってもっている考え」(『大辞泉』)を表し、「その場の決定・決心の表現にはあまり使われない」(国際交流基金)ためである。日本の

大学生の会話データ（8.6時間）では、意志表示の形式123件中、最多はスル54件（43.9%）、シヨウ40件（32.5%）で、ツモリは1件、通常中級と見なされる「つもりはない」の形で現れた。「頑張ってください」への返答は「ありがとうございます」7件、「頑張ります」2件、その他3件で、ツモリの使用はない。NLTコーパス（NINJAL）の動詞＋ツモリの例は45,393件あるが、最多は状態動詞イル（例：知っているつもり）で、2種にあたる。小林（2005）の会話データ（64時間）ではツモリは40件のみである。最多は「つもりで～する」（17/40）、次いで「つもりはない」（6/40）だが、「つもりです」は1件もない。小林の言うように、教科書は「『つもり（だ）』の使われやすい形式を反映していない」。教育の現場では当該文法項目の使用実態を考慮する必要があると思う。

「日本語教育のための品詞論」(Parts of speech for JFL education)

Michio Tsutsui, University of Washington

学習者が効果的・効率的に言語を学習するためには文法の知識が極めて重要で、これなくしては文構造の正確な理解や正しい文の産出は難しい。そして、中でも重要になるのが、言語の基本要素である個々の語彙項目の品詞情報知識である。しかし、日本語教育の教科書や参考書においては、品詞表示が全くないものや表示に統一が見られないものが少なくない（例えば、ダロウ、伝聞のソウダ、カモシレナイなどの文末詞、ツモリ、ハズなどの形式名詞、タメ、ママなどの接続詞など）。これらは、文法解説の中で意味や用法の説明はあっても、品詞情報が与えられていないことが多い。また、品詞が表示されている語彙項目でも、その妥当性に疑問があるもの（例えば、今日、時、場合、結果などを単に名詞とすること）や、品詞としての位置付けがはっきりしないもの（例えば、オノマトペは副詞か別の品詞か）もある。そして、このような品詞の規定・提示上の不備や不統一は、不必要に学習者の効果的な日本語学習を妨げるのではなかろうか。なぜなら、品詞の適切かつ統一的な表示は、それを積極的に参照することで、個々の文法だけでなく、日本語の様々な仕組みをしっかりと学習者に理解させる助けになるからである。本発表では、まず、品詞情報がなぜ重要か、品詞情報はどのように日本語学習に利用できるかを具体例とともに示し、次に、これまで品詞記述が明確にされてこなかった語彙項目や、慣習的な表示に問題があると思われる語彙項目を吟味しつつ、全ての語彙項目を系統的に品詞分類する基準を提案する。そして、品詞標準化のために今後さらに研究・議論が必要な問題領域を提示する。

12:00 p.m.–12:30 p.m. — Lunch Break

Sandwiches can be purchased in the hotel lobby's Link Cafe. Coffee and tea will be available in the Birchwood Ballroom.

12:30 p.m.–2:10 p.m. — Session 3

SESSION 3-A: PEDAGOGY PAPERS [PINE EAST ROOM]

Chair: Yoshiro Hanai, University of Wisconsin, Oshkosh

「文章構造を変えないで言い換えることはどこまで可能か — 上級日本語学習者が書いた要約文における言い換え表現の使用状況を通して」(Is it possible to paraphrase a text without changing the original structure? — A look at the use of paraphrasing expressions in summaries written by advanced students of Japanese)
Mitsuko Kido, University of Tsukuba

本研究では、上級日本語学習者の要約文について文章論の方法に基づいて構造分析し、原文の文脈がどのような言い換え表現によって要約文に表現されているかを報告する。この結果を踏まえて、学習者の書く要約文の多様性を客観的に評価し、作文学習に活かす方法を提言する。筆者が2008年度より大学で行っている上級作文授業の記事要約練習において、学習者が書いた要約文を分析した。この要約練習では、単なる情報の取捨選択ではなく、日本語の文章構造を理解する作文練習として、原文の構造を変えない要約文の作成を行っている。その結果、要約文における言い換え表現には、構造に関わる要素である接続表現や提題表現などに一定の使用傾向があることがわかった。例えば、要約文での接続表現の使用において、原文の文脈に対比的な事柄がある場合、原文と同じ対比の接続詞「一方」、それと同じ接続関係の「それに対して」を用いる要約文だけでなく、逆接の接続詞「しかし」を用いる要約文も見られた。このような逆接の接続詞の使用は誤用ではなく、原文の前後の文脈の中に逆接的な意味を含む対比が認められることによる。これが同一の原文に対して複数の構造タイプの要約文が見られる要因の一つと考えられる。鎌田美千子(2012, 2014, 2015)はパラフレーズ（言い換え）を日本語教育で取り上げる重要性を指摘している。本研究の要約文の構造分析の結果からも言い換えは学習者の要約文を評価する重要な指標となっていると言える。原文の構造を変えない要約文を言い換え表現に基づいて構造分析することにより、文章構造の認定要素という客観的な評価基準を作文学習に活かすことができる。

「初級での読解量を増やす必要性と方法」(Increasing the amount of reading at the beginning level: Needs and methods)

Yoshiro Hanai, University of Wisconsin, Oshkosh

近年の調査では、読解力が、話す、書くなどの産出能力に比べて速いペースで習得され、より高い到達目標を設定出来るということが報告されている(Cutshall 2015; Tschirner 2016)。しかし、現行の一般的なカリキュラムでは、四技能のバランスを考え、産出出来るレベルの語彙や文型を使った読み物を読ませることが多いため、特に初級段階での読解練習は量・質ともに十分であるとは言いがたい。近年、読解量の増加に焦点を置いた多読の試みも注目されているが、初級レベルに関して言えば、学習者の言語知識の不足と教材不足は明白であり、このレベルで最も効果的なアプローチと呼べるかどうかには疑問が残る。学習者の潜在的な言語学習能力を最大限に引き出すためには、このような状況を見直し、学習の早い段階からより充実した読解教育を行う必要がある。本発表では、発表者が開発した初中級用日本語教科書『ポップカルチャー NEW & OLD』とそのウェブサイト (learnjpcinjapanese.com) を使用した日本語コースを例に、初級レベルから内容を重視した読解を増やす必要性について議論し、具体的な方法を提示する。この教材は、江戸時代の大衆文化から現代のポップカルチャーを題材に全八課で構成され、各課3,500字以上という今まで初級レベルではされてこなかったような質と量の読解を、文型のコントロール、テクノロジーの活用、読解教育理論の応用などにより可能にしている。発表では、初級レベルからこのような高度な読解が可能であることを示し、それによって可能となる読解教育を強化した新しいカリキュラムの一例を提案する。

「ハイブリッド型多読授業：個人からオンライン空間へ」 (Hybridizing extensive reading in a Japanese course: Moving from individual to online spaces)

Yuki Yoshimura and Sharon Domier, University of Massachusetts, Amherst; Hisako Kobayashi, Mount Holyoke College

本発表では本校と遠隔大学2校の計3校を対象に行う実教室内授業とビデオカンファレンスをかけ合わせたハイブリッド型多読授業の実践方法を紹介し、その利点と難点を報告する。本校の多読授業は2013年に個別指導から始まり、2015年に単位取得可能な授業へと進展し現在に至る。授業提供の形が変化するに伴い、一対一の対話形式による読書確認から、統一された読書記録用紙を用いるようになり、現在ではアンケート型のオンライン読書記録を使用するに至った。多読の支援者である教師はカメラを通して遠隔大学の学生へと話しかけ、学生が読んだ本について発表するブックトークもビデオカンファレンス上で行われる。熊谷・瀨瀬(2015)始め、多読で困難とされるアセスメントを2016年秋に初めて導入し、学期末に学習者自らがオンライン上で学習の成果を確認できるよう試みた。このような規模での授業提供は、マルチメディア技術なしには不可能であり、ハイブリッド型の大きな利点と言える。またオンライン上の読書記録は、教師、TA、学生が各自で同時に学習進度を確認でき、効率的に自律学習を支えることを可能とする。更に図書館司書とのデータ共有により、今後、購入候補となる人気本の情報共有もできる。書き込み型の読書記録用紙と比べ、電子機器からワンクリックで完了できるアンケート型のオンライン読書記録は、学生にとってもシンプルで利便性が高い。その一方、学期末の調査から、学生は多読のために集まる物理的な空間を大切に思い、9割以上の学生が電子本でなく紙の本を好むことがわかった。オンライン化が進む中、伝統的な読書方法が好まれるギャップを元に、今後のハイブリッド型多読授業の方向性を示す。

「読解授業での多読」 (Tadoku - Extensive Reading - in Japanese reading class)

Keiko Ueda, University of Missouri, St. Louis

多読は英語教育に比べまだ一般的ではないが、日本語教育においても多読の実践に関する論文が増えてきた(熊田他 2015)。実践にあたっては、多読の独立した授業、もしくは既存の日本語のクラスの一部として行われているようだ。開講に先立ち、まず多読クラブから開始し、学習者の関心度を測り、学部や図書館司書達への理解を深めた上で開講に繋げる場合もある。しかし筆者の勤務校は、通学者が多く、フルタイムの仕事をしてながら通っている学生が多い環境で、クラブとして成功させることは難しいと考え、読解授業での実践を試みた。近年、米国での日本語学習者は多様化し、学習者の母国語や学習目的も様々で、テクノロジーの発展に伴い独学者も増える中、個々のニーズ、レベルに合わせたクラス活動の必要性は年々増している。また、学習を長期的に継続するには自律心を養うことが重要だが、一斉授業で個々に合わせた活動をするのは容易ではない。しかしそうした学習者への対応策として、瀨瀬 (2015) は個別活動を主とする多読授業を提案し、多読の自律学習者育成の解決策としての有効性を述べている。また、近年学習者や予算の減少により、中上級のクラスが削減されたり、異なるレベルを一つのクラスに入れたりせざるをえないという問題も起こっており、筆者の勤務校でも読解の授業は3、4年生合同である。そういった環境においても、個々のレベルに合わせて読む多読の活動は効果的であったと言える。本発表では、多読の実践をコース終了後の学生へのアンケートの結果と共に報告する。また、今後多読の取り組みをどのように発展させて行けば良いかの考察についても触れたい。

SESSION 3-B: SECOND LANGUAGE ACQUISITION PANEL [CEDAR ROOM]

Chair: Hiroyo Nishimura, Yale University

Panel Title: 「ことばと音楽、記憶との関係：言語習得における音楽の役割」 (Language, Music and Memory: The Role of Music in Language Acquisition)

Panel Abstract: 音楽とことばは一見異なったものに見えるが、切っても切れない関係がある。例えば、歌はことばとメロディーを結びつけたものである。文字のない時代から、人は音楽を通じ、ことばを通じ、様々なものを伝承してきた。それは音楽とことばそのものであったり、その深層部に存在するものであったりするが、それらは長期記憶として一個人の中に、或いは世代を超え、人々の記憶の中に歴然と、時には潜在的に存在している。そして現代科学で記憶の仕組みが解明されるにつれ、長期記憶(顕在記憶と潜在記憶)を可能にする状況が明らかになってきている。本パネルでは、その音楽とことば、記憶との密接な関係について論じる。そして、その関係を応用した効果的な言語習得について述べ、実践報告をする。発表1では「人間の記憶」に焦点を当て、人間の記憶は全てメロディーと同様の形で脳内に表現され蓄えられ

るという理論を踏まえ、メロディーと記憶との関係を、長期記憶、特に潜在記憶レベルで、認知心理学及び学習心理学の観点から解説する。発表2では音楽(歌)が記憶保存の能率を上げ、長期記憶にも役立つという理論に基づき、歌が語彙学習に及ぼした影響を、2群間で行った実験結果を比較しながら報告する。発表3では、発表2で述べる理論を踏まえ、記憶に残り易いメロディーについて言及し、聴覚だけでなく視覚等の多感覚に刺激を与えると記憶が飛躍的に促進されるという理論をもとに開発した“Japanese Through Music”の紹介、及び授業での活用法やその効果を含めた実践報告を行う。発表4では音楽の中に存在すると考えられる「きまり」と言語の中に存在する「きまり」との様々な共通点を明示し、それを外国語教育に利用する可能性について考察する。

「記憶の常識を覆すメロディーの潜在記憶と教育ビッグデータ」(The implicit memory of melodies and education: Big data that override common sense about memory)
Takafumi Terasawa, Okayama University Graduate School of Education

人間の長期記憶は、顕在記憶(explicit memory)と潜在記憶(implicit memory)に分けられる。前者は、一夜漬けの学習効果の基盤であり、後者は資格試験などで測られる実力や言語能力の基盤とされる。教育においては後者が重要であるのは間違いないが、潜在記憶に与える学習の影響は従来の記憶(顕在記憶)とは全く異なる特徴を持つ。本話題提供では、意味を同定できない音列(メロディー)を1,2度聴き流した経験の影響が、2~4ヵ月後に、想像を超えるほど大きな効果として検出できる事実を紹介する。つまり「感覚記憶は残り続ける」という、常識を覆す確実な事実を、デモを交えて紹介する。さらに、それらの事実は、日々のわずかな学習の効果を過小評価してはいけないことを意味している。逆に、日常の膨大な学習内容に関する学習イベントの生起タイミングを、年単位で詳細に制御し、膨大な学習データを収集できれば、微細な学習効果の積み重ねをグラフとして可視化できると考えた。その考えの基、学習を「いつ」行い、それからどのくらい「インターバル」をあけてテストをするのかといった、何十万というイベントの生起スケジュールを、学習者ごとに自動生成し、それに対応する大量の反応データ(教育ビッグデータ)を収集、解析し、さらにその結果を個別にフィードバックするコンピュータシステムを構築した。それにより、学力低位の子どもであっても、学習量に対応して成績が上昇していく結果を個別にフィードバックし、学習意欲を高めることが可能になり、日本では、複数の自治体で社会実装が始まった。自身の潜在記憶の積み重ねを見ることで、全ての子どもが、「やればできるようになる」事実を実感できる状況が生み出された。

「音楽(歌)が語彙学習に及ぼす影響(理論を踏まえての実践)」(Effect of song on vocabulary acquisition)
Noriko Mori-Kolbe, Georgia Southern University

幼少期に歌った歌を今も歌える人は多いのではないだろうか。この現象に関してMurphey (1990)はSong-stuck-in-my-head phenomenonを説明し、それがKrashen (1983)のDinに似ていることを指摘した。音楽は主に右脳で、言葉は左脳で処理されるので、音楽を使った語学学習では両脳が活性化され、且つ繋がり(Bancroft, 1999)、結果記憶されやすくなるのである。又、音楽は長期記憶に貯蔵されている情報の想起時にアクセスの確率と速度も上げるといわれている(Salcedo, 2010)。教科書にも「て形」の歌が載っており、インターネット上にも日本語教師がアップロードした教授用の歌が見られる。サジェストペディアは感覚入力(視聴覚や運動感覚)を駆使して記憶力を向上させ、単語や文法の暗記を加速させるSuper learningとして知られている。そして音楽は学習者をリラックスさせるので情意フィルターが低くなり、言語学習が促進される。又音楽は楽しいので学習者の動機づけを高め、それにより学習効果が上がる(Lozanov, 1978)。本発表ではアメリカの大学における日本語初級コースで行われた歌を使った語彙学習の実験研究を報告する。筆者は2群間の単語記憶の比較を行った。実験群には歌を用いた指導を行い、統制群には歌無しの指導を行った。52人の学生に単語テストをプレ・ポストテストとして行い結果分析したところ、ポストテストに2群間で有意差が見られた。コース受講者から収集した学習経験についてのアンケート調査結果も報告する。最後に歌の選択や導入の留意点について論じたい。

「オンラインミュージックビデオ教材“Japanese Through Music”の開発とその実践活用例」(The online music video teaching resource “Japanese Through Music”: Its development and application in the classroom)
Hiroyo Nishimura, Yale University

本発表では言語習得を目的としたオンラインミュージックビデオ教材“Japanese Through Music”の開発及びそのサイトの活用法と効果について実践報告を行う。音楽の言語習得に対する影響は大きく、言語は音楽と結びつくと習得が促進されると言われている。特に覚え易い旋律や知名度のあるメロディー・リズムとの組み合わせで、言語は長期的記憶が可能になり(Wallace, 1994; Kind, 1980; Williams, 1983)、学習意欲を高めるという相乗効果も生む(Murphey, 1992)。更に画像を加える等、多感覚を最大限に活用することにより、歌は記憶を強化する能率的な学習ツールになる(池谷, 2010; Garnett, 2005; Lake, 2002; Medina, 1993, Jolly, 1975)。Jポップや歌謡曲を授業に活用している教育機関もあるだろう。しかし「日本の歌」には未習の学習項目や文化背景等追加説明が必要なものも多いと推測する。能力次第ではそういう歌も学習に役立つが、学習者のレベルによっては、学習項目以外の負担をかけず、必要な項目だけに集中させることが肝要だと考える。また歌を扱った学習者向けの出版物も存在するが、視覚教材を伴った教材は多くないようである。そこで“Japanese Through Music”では、学習項目が負担なく長期的に記憶されるのを促す教材を作成することを目標とし、(1)学習項目を選定して作詞、(2)知名度が高いメロディーを選曲、もしくは単純で繰返しが多く耳に残り易いものを作曲、(3)その歌に付随する視覚教材を作成、(4)音声を録音または作成、という手順で作成したビデオを収集した。本発表ではそのサイトの紹介と授業への活用法、特に学習者の韻律に及ぼす効果(聴解・口頭達成度)や学習者の反応について報告する。

「ことばは音楽と関わっているか」(Is language connected with music?)
Seiichi Makino, Princeton University

この発表では、次の2点を明かにすることにある。1つは、音楽は「音」という言語の中核の要素を楽しむ文化カテゴリーで、その中でも言語に劣らないような「きまり」があるのではないか。2つ目は、ことばと音楽が相互に関わるとすると外国語教育にも音楽と関わる形で利用できるのではないか。まず第1点に関して、ことばも文化としての音楽も伝承され、変化していくが、中核は残る。(2) 形と意味が有縁なときと無縁なときがある。(3) さまざまな程度の「きまり」がある。この3点は言語文化と非言語文化にかなり共通している点で、非言語文化としての音楽もその一つのケースにすぎないであろう。さらに次のような共通項が出てくる。(1) ことばも音楽も「音」が中心であるがそれを視覚化する表記と楽譜がある。(2) 話しことばにも音楽にもリズム、抑揚(メロディ)、長調・短調、音の強弱、高低、休止などがある。(3) ことばにも音楽にもフレーズのような「かたまり」がある。(4) ことばにも音楽にも聞き手を引き込むための「繰り返し」があり、その反復こそがリズムを生み、人を引き込む力になっている。(5) ことばにも音楽にもテーマがあり、その展開がある。(6) 第2言語習得と音楽の習得もパラレルで、「臨界期」がある。(7) ことばにも最小の単位(音素、単語、形態素)があるが、音楽にはドレミと半音など音素に当たるものがある。(8) さらに、ことばにも音楽にもそれが「水」であるという深層の隠喩が成立するので「ことばは音楽だ」という深層の隠喩が成立する。「ことばが音楽」であれば、日本語教科書の会話の楽譜化の可能性はある。

SESSION 3-C: SIG-FOCUSED PAPERS (STUDY ABROAD FOR LANGUAGE ADVANCEMENT SIG)[LINDEN ROOM]

Chair: Atsushi Hasegawa, University of Kentucky

「留学生は日本の大学寮で何を学んでいるのか」(What do students learn in residence halls during study abroad in Japan?)

Fumi Yamakawa, Toyo University

本発表の目的は、日本で日本語を学ぶ留学生が大学寮で何を学んでいるのか、またその学びが生まれるメカニズムとは何か、ということをも明らかにすることである。留学生は、教室内だけではなく教室外においても多くのことを学んでいる。特に、大学寮は様々な背景を持つ学生が共同生活を送っていることから、文化理解やコミュニケーション能力の向上など、多様な学びが生まれると評価されている(Vande Berg, Connor-Linton & Paige, 2009; 正宗, 2015; 望月, 2013)。しかし、大学寮がそのような貴重な教育の場であるにも関わらず、寮での学びに関する研究はあまり進んでいない(Ogden, Dewey & Kumai, 2011)。そこで、本研究は留学生と日本人学生と一緒に住む大学寮に注目し、留学生5名に対し寮生活に関する半構造化インタビューを行った。その分析の結果、【共同生活に対する理解】、【他者との関係性への気づき】、【文化・社会に対する理解】、【日本語の獲得】、【生活の自立】という5つの学びがあることが明らかになった。また、そのような多様な学びが生じたのは、「活動的資源」、「人的資源」、「物的資源」の3つのリソースが常にアクセスできるよう配置されていたからであった。つまり、寮にはそのようなリソースの巧みな配置があり、リソースへのアクセスが可能であったからこそ、学びが保証されていたと言える。以上のことから、留学生が大学寮において学びを獲得するためには、単に留学生と日本人と一緒に住めばよいということではなく、そこに学びが生起するメカニズムを仕掛けていくことが重要になってくると言える。

「日米2キャンパスにおける双方向共修活動の教育デザイン分析—日本語教育への応用—」(An analysis of educational design for US-Japan two-way collaborative learning: Application to Japanese language education)

Akiko Murata, Hosei University; Yuko Prefume, Baylor University

グローバル化が進む中、海外と日本の大学間で学生が双方向に移動し、学び合う機会が増えている。これまで日本語を用いた国際交流は教室内、課外活動として日本語教育に取り入れられているが、日本と海外の2キャンパスを学生が移動して学び合う共修活動の分析は十分には行われておらず、その教育的な意義、そして日本語教育における応用の可能性を明らかにすることが求められている。本報告では、こうした視点から日米の2キャンパスを移動して行われる双方向共修活動(双方向の学生間の言語支援活動と協働調査)の実践分析を行い、日本語教育における教育的な意義を明らかにする。分析に枠組みとして、これまで行ってきた学生間協働フィールドワーク(村田・佐藤2015)、日伊の双方向インターンシップの相互作用(村田・Mariotti2016など)で得られた知見を参照し、その上でこれまで分析できていなかった具体的な双方向共修の教育デザインの分析を行う。これを通じて世界各国の日本語教育関係者が協働でこうしたプログラムを策定する上で役立つ知見を提供する。分析対象は、2016年の6月から2017年の2月の間に行われる日米の2キャンパスをつなぐ双方向共修活動の教育デザインと学生間の相互作用で、データとして、共修活動中の録画、観察記録、学生の報告書、インタビュー結果などを分析する。

“An initial analysis on why U.S. university students elect not to study abroad in Japan”

Thomas Mason, ALLEX

This paper, based on initial analysis of data collected for the author's doctoral dissertation, presents a framework for understanding the reasons fewer U.S. university students are choosing to study abroad in Japan. Study abroad directors, on-site residential directors, and Japanese instructors have recently spent much time lamenting the decrease in student enrollment in academic-year and semester-long study abroad programs. At the same time, summer-only study abroad participation is increasing. Relying on data from nearly 100 student-respondents from universities across the country and a significant number of faculty participants, this paper presents the issues, often from a student perspective, on why study abroad in Japan has become unattainable for many undergraduate students in our language programs and shares an initial analysis on how programs can be redeveloped to better serve an undergraduate population wanting – but unable – to study abroad.

「短期留学中の社会ネットワークの形成と言語使用の変化」 (Study abroad, social network, and language choice: A preliminary report)

Atsushi Hasegawa, University of Kentucky

留学することの意義は数多く存在するが、言語習得との因果関係に着目した研究では、一貫した結果が報告されていない (Kinginger, 2013)。これは、留学中の経験 (言語行動を含む) が多様であるからだとと言える (Wilkinson, 1998)。特に、学習者が構築する人間関係が言語使用に大きく関わっていることは、先行研究でも報告されている (Dewey, Belnap, & Hillstrom, 2012)。しかし、学習者の社会ネットワークの変化を詳細に記述し、その変化と言語使用の関係を質的に分析する試みはあまり行われていない (Ring, Gardner, & Dewey, 2013)。そのため、本研究はこの課題に着目し、日本で実施された9週間の夏期集中プログラムで、調査を行った。このプログラムでは、期間中の日本語以外の使用が禁止されている。また、留学生は地元の日本人大学生と一緒に同じアパートで生活するので、日本語使用の機会が多く用意されていると言える。まず、留学生の人間関係の変化を見るために、アンケートによる社会ネットワーク調査を、プログラム開始時と終了時に実施した。途中の変化を記述するために、クラス外活動 (昼食、放課後、課外活動など) の参与観察、半構造化インタビュー、会話の録音を行った。収集したデータは社会ネットワーク分析の枠組みで分析した (Felmlee, 2003)。発表では、分析結果の一部を紹介する。学習者による人間関係構築パターンの差異が見られたと同時に、個人内においても、プログラム中間点で言語選択に大きな変化が見られた。どのようにしてこれらの差異や変化が起きたかを考察し、発表する。

SESSION 3-D: LANGUAGE AND TECHNOLOGY PAPERS [PINE WEST ROOM]

Chair: Kazumi Hatasa, Purdue University

「バーチャルワールドを用いた体験型コミュニケーション学習：会話分析から見えるもの」 (3D virtual world for experiential communicative learning: A discourse analysis of learner interactions)

Kasumi Yamazaki, University of Toledo

コンピューター支援言語学習 (CALL) の研究が発展していく中、日本語教育分野でも今、様々なCALL環境や教授法が調査されている。過去5年間の先行研究にも見られるように、オンライン学習やブレンディッドラーニング等もより一般的になり、テクノロジーも単体でなく統合型での導入が多くなった。現在ではさらにハイテク分野でバーチャルリアリティ (VR) や大規模複数人同時参加型オンライン (MMO) ゲームの開発が進み、より革新的な体験学習が可能なCALL環境も整ってきている。しかし、日本語教育分野でのVRやMMOを取り入れたCALL研究は依然として稀少なため、筆者は2年前から3Dバーチャルワールドを取り入れた日本語学習カリキュラム: CALL (Computer-Assisted Learning of Communication) の実用性を追跡調査している。このような背景から本稿では、3Dバーチャルワールドゲームを用いた体験型コミュニケーション授業の活動例を紹介し、プログラムの舞台となる仮想都市東京で、調査対象である日本語学習者 (n=21) がどのようにコミュニケーション学習を深めていくのかを調査した。CALLカリキュラムでは、特に、MMO 3Dというゲーム環境を最大限に生かした学習活動を取り入れることで、学習者はより「聞き手を意識した話し方」の上達を目指した。なお今回の調査では、2014年秋から2016年秋までの2年間で回収した活動中の発表内容やチャット履歴等の会話データに注目し、3DバーチャルワールドというCALL環境が学習者に与える学習効果を、社会文化的、認知心理学的観点の両方から考察する。

「ARISコンテンツの実践と評価 一初級、中級、上級から一例ずつ」 (Execution and evaluation of three ARIS contents)

Kazumi Hatasa, Purdue University

ここ数年「ポケモンGo」「インGRESS」などのゲームや「ヒロシマアーカイブ」のような教育的な目的を持ったものなど拡張現実 (AR) を応用したアプリが広がりを見せている。ミドルベリー大学夏期日本語学校では2014年からウィスコンシン大学で開発されたARISを使い、ARと日本語学習の接点を探っている。今年は、学習者に試してもらった五つのARISコンテンツの三つに関して評価を行うことができたので、その報告をする。初級では授業の最終日にスカベンジャーハントを実施し、学生たちは14項目のタスクを行いながらキャンパスの中を動き回った。中級は来年の学生に紹介したいミドルベリーのスポットをグループ作文という形で書き、朗読音声と写真を教師に提出した。教師がそれをARISエディターで処理し、コンテンツに仕上げた。上級では副読本の「30の物語 中上級-人物で学ぶ日本語」(くろしお出版) に登場する人物10人の紹介をARISコンテンツにし、読む前の準備活動として使った。それぞれのレベルで内容とARIS 対しての評価をするアンケートを実施した。スカベンジャーハントは試験後の実践ということで、楽しんだという意見が多かったが、技術的な不具合の発生も指摘された。タスクの中ではシミュレーションが一番高評価を受けた。中級はARISよりも、グループ活動に対する評価、実施時期が期末試験の前でもあったことで、評価が分かれた。内容には高評価を得たので、来年はセッションのはじめに今年の学生が作ったもの紹介して、動機付けに繋げたい。上級の学生からも概ね高評価を得たが、まだまだ改善点があることも指摘された。

「ビジュアルノベル - 「ゲーム感覚で読める」初級読解教材の開発」 (Development of an online novel for Japanese language learners at the novice level)

Yuta Mori, University of Michigan

初級レベルは語彙と文法に限られているため、学習者の好奇心や興味に沿ったトピックの読解教材を作成するのが難しい。また、多くの場合、初級日本語学習の目標は、日常会話ができることであるため、「読む・書く」よりも「聞く・話す」

に重点が置かれる傾向があり（加納,1992）、読解教材は、その課で学習した文型や語彙の総合学習としての使用に留まることが多い（市川他,2006）。しかし近年、多読を取り入れた授業（二宮,2013）や、ストーリー性のある教材開発の取り組み（渡辺・上田,2016）などの実践報告から、達成感や満足感が得られる読書活動を初級段階から行うことの重要性が指摘されている。本研究は、ビジュアルノベルを利用し、日本語を習い始めてすぐの学習者でも、楽しみながら読める教材作成を目的とした。ビジュアルノベルとは、コンピューターやタブレット上で、絵や写真、音楽と共に物語を読むことができるゲームの一種である。現在、ビジュアルノベルは誰でも作成が可能であり、物語の途中で選択肢を与え、その選択によって物語を分岐させることもできる。このプログラムを利用し、実際に学習者が日本に留学した際に体験するであろう状況や、様々な文化的要素を取り入れた物語を、ゲーム感覚で読み進めることができる教材を開発した。本発表では、この読解教材を実際に使った学生達（≒35名）へのアンケートの回答を基に、ビジュアルノベルを初級レベルの読解教材として活用することにより、学習者の情意面、また言語能力と文化的能力の向上にどのような効果があるかを考察する。

“Conversation success and failure: A telecollaboration case study”

Kiyomi Fujii, Kanazawa Institute of Technology; **Yasuo Uotate**, University of Florida; **Yuka Matsuhashi**, Temple University, Japan Campus

Rapid technological development offers new options for learning languages and cultures. Telecollaboration especially enables learners to interact with other students and target-language speakers throughout the world. Previous studies have proven that learners improve their language abilities (Belz & Kinginger, 2002; Hirotsu & Lyddon 2013) and intercultural competence (Byram, 1997; Elola & Oskoz 2008; Jauregi & Canto 2012), as well as raise motivation (Fujii et al., 2015; Jauregi et al., 2012) through telecollaborative projects. Although there are many advantages to such projects there are also pitfalls. For example, these activities depend on participant engagement, because it influences not only their level of participation (O'Dowd & Ritter 2006) and expectations (Ware 2005), but the overall experience for their fellow participants. Too wide a gap between a participant's commitment and that of his or her counterpart will not yield optimal results for either. The authors of the present study have developed language-learning activities between JFL and EFL learners as part of a telecollaboration project, which comprised a series of video and written exchanges between the two groups at US and Japanese universities using Facebook. The present study investigated conversations between these learners during the course of the project. The data include questionnaire responses collected before and after the project, video data created in the target language, and participants' perceptions gathered from reflection logs. In this study, the data are compared between JFL and EFL learners to examine successful and failed conversations. The results show certain detectable patterns that result in continued conversation between both learners. Also, the results show that technological literacy affects their conversations. This paper will provide a brief overview of the project and report the salient results attained through our analysis. We will also share pedagogical implications of the results, and suggest additional ways to implement a telecollaborative language-exchange project.

SESSION 3-E: PEDAGOGY PAPERS [CHESTNUT WEST ROOM]

Chair: Satoko Ogura Bourdaghs, Columbia College, Chicago

「日本語クラス内における「谷川俊太郎」作品への多角的なアプローチ」 (Various approaches to the works of Shuntaro Tanikawa in Japanese class)

Teruka Nishikawa, University of Winnipeg

さまざまなジャンルの文学作品を教材とした日本語授業の実践報告は多くある。例えば、「俳句」というジャンルに注目し、「俳句とは何たるや」から始まり、鑑賞、そして俳句コンテストに至る一連の俳句シリーズ教案など。では、ある一人の作家に注目し、他の分野の芸術家とのコラボレーションを通しての作品を鑑賞し、考察するという形での授業形態はどうであろうか。谷川俊太郎の芸術活動範囲は、詩を創作するにとどまらず、色々な芸術分野とのコラボレーションもさかんに行なうなど、広い。例えば、主にカナダの風景を題材として活動する写真家吉村和敏との「言葉と写真」のコラボレーション。「詩を音楽」のコラボレーションは音楽家である自身の息子や日本を代表する作曲家である武満徹をはじめ多岐多彩である。文学作品として谷川の詩のみを扱うだけでなく、他の芸術分野の専門家と谷川の共同作業が生み出した作品を日本語授業に取り入れることで、学生たちは日本の他の芸術分野との関連させた幅広いジャンルの芸術作品に多角的に触れることができる。また、文学作品としての詩そのものの受け入れや、理解がしやすくなるなど、鑑賞がより深いものになるのではなかろうかと考えた。そこで、カナダのウィニペグ大学中級日本語クラスで、写真家吉村和敏による、学生には身近なカナダの風景写真に谷川俊太郎が詩をつけた写真集「朝」「ゆう」、そして谷川の詩に武満徹が音楽を担当した合唱曲「恋のかくれんぼ」を教材としてとりあげた。本発表はその実践報告であり、谷川の詩のみ扱った授業と、写真や音楽を伴った詩を教材とした授業において、学生の受け入れ度、理解度や記憶の比較結果を報告する。

「語彙ネットワーク構築のための支援の可能性—語彙マップ作成とその運用の実践から」 (Support for learners in building semantic and syntactic networks: "Vocabulary maps" and their classroom use)

Satoko Ogura Bourdaghs, Columbia College, Chicago

本発表では、初級日本語学習者を対象とした語彙習得支援の可能性を応用認知言語学を基盤として考察し、実践で試みた「語彙マップ」の作成過程とマップを使用した教室活動を紹介する。学習者が既習語をカテゴリー化しなおして概念ネットワークを構築していくこと、そして既習語を積極的な日本語話者として運用し単語から文法へとネットワークを拡張していくことに焦点を当てた。語彙は学習者が各自暗記するのに任せきりになりがちだが、次々と押し寄せる新出単語に消化不良を起こす学習者を数多く見て来た。日本語教育においては、複合動詞や多義語などの認知言語学的分析研究が多くみられるようになったが、実践報告は少なく、初級レベルからできる教室活動の報告は管見の限り皆無である。そこで、

既習単語を学習者自身が整理し直すことが必要だと考え、試みとして中心にテーマとなる語を置きそこから学習者が喚起する語を放射状に書き広げていくという活動を行った。これが「語彙マップ」である。各々が作成したマップについてお互いに説明し合う活動を経て、最終的には自己紹介文を書いた。情意フィルターが低かったこと、既習単語を自分との関連で見直せたこと、個性が発揮できたこと、語と語の間には何らかの関連性があるので無意識に統語レベルで語の配置を考えていたこと等から、学習者が既習語を咀嚼しなおす有効な活動であったと考える。さらに、語が文の構成要素であることをネットワーク図として可視化することによって、語彙のみならず文法習得促進に繋がる可能性もある。意味や文法概念を構築してゆくのはあくまでも学習者自身でなければならないが、そのための支援は可能である。

“A study of the pragmatic uses of *chotto* “a little” by non-native Japanese speakers: From the perspective of intersubjectivity”
Yan Wang, Carthage College

The Japanese adverb *chotto* ('a little') is often used by native speakers (NSs) to decrease the degree of the intensity or lighten the force of speech acts such as requesting (Matsumoto, 2001). Introduced as a hedge expression in the beginning level of Japanese textbooks, *chotto* consequently frequently appears in Japanese learners' conversations. Using discourse analysis to analyze the on-going interactional sequences where *chotto* occurs in free conversations between non-native speakers (NNSs), this study investigates whether *chotto* is used by NNSs in similar ways as NSs, and examines various interpersonal/ intersubjective factors that trigger the usages of *chotto* as a pragmatic mitigator. My study demonstrates that *chotto* is primarily used by NNSs to mitigate the forces of speech acts that potentially burden, impose, or challenge the addressees; for instance, to make new assertions, express personal feelings, and perform various Face-threatening Acts such as negative assessment, disagreement and rejection. NNSs can skillfully manipulate *chotto* to express different opinions while negotiating with each other in an affective manner, as shown in the example below. T: *Tokidoki yonensei no toki, Nihongo no jugyoo ni suwarimashita. Sannensei no ressen wo mimashita. Chotto...* “When I was a senior, sometimes I sat in the third year's Japanese class and watched the third year's lessons. Sort of...” G: *Soo da ne.* “That's right” T: *Chotto taihen desita. Demo, ano, sannensei wa nihongo wo hanasu no wa...* “It was sort of tough. But, umm, the third year students' Japanese speaking is... G: *Chotto ii=* “Sort of good” T: *=Chotto [heta, hahahahaha* “Sort of bad” G: *[Iyaiya chotto hahahh* Yeah yeah, sort of... With *chotto* as an example, my study suggests that intersubjectivity, the speaker's interactional attitude toward the situational and/or social relationship with the addressee, is a universal element that deserves more attentions in language acquisition and pedagogy.

SESSION 3-F: LINGUISTICS PAPERS [CHESTNUT EAST ROOM]

Chair: Kotoko Nakata, University of Kansas

“Explicit learning of Japanese mimetics using voicing, gemination, and reduplication rules”
Kotoko Nakata, University of Kansas

Mimetics are commonly used by Japanese native speakers to express the manner of actions and sensations. However, they are often not taught explicitly in many Japanese language classrooms. The current study will test a novel teaching methodology to help English-speaking learners of Japanese learn Japanese mimetics. Learners will be explicitly taught three phonological/morphological rules during learning. The three rules are: (i) voicing, (ii) gemination, and (iii) reduplication. In Japanese mimetics, these phonological/morphological factors systematically affect the meaning of mimetics. Mimetics with voiced sounds often express largeness, heaviness, roughness, and aggressiveness, whereas mimetics with voiceless sounds often express smallness, lightness, smoothness, and quickness. Gemination in mimetics often indicates that the movement/action is quick and instantaneous. Reduplication usually indicates that the movement/action is repeated consecutively. The current study examines whether explicitly teaching these three rules helps English-speaking learners of Japanese who vary in Japanese proficiency acquire mimetics as well as helps them generalize these rules to newly encountered mimetics. The procedure uses a Pretest-Learning-Posttest design. The Experimental group will explicitly learn the three phonological/morphological rules while the Control group will not. In the Learning Session, all participants will be taught 32 mimetic words with a verbal description (a static picture along with a sentence that contains the mimetic word). All learners will then participate in a Posttest and a Delayed posttest (one month later) to assess their retention of the mimetic vocabulary. The current study will assess (i) whether this novel teaching methodology can aid in learning mimetics using verbal descriptions and, (ii) whether learners' proficiency affects learning mimetics, and (iii) most importantly, whether explicitly knowing the three phonological/morphological rules plays a role in acquiring mimetics as well as retaining the lexical knowledge.

“A study on the use of *zenzen* with affirmative vocabulary”
Hyunji Kim, University of Oregon

This study was inspired by a normative understanding that *zenzen* must be used in negative contexts. The present study, first, by exploring the actual examples from Japanese literature, investigates the historical background of *zenzen* and the changes in its use in order to confirm what attributes to the misleading normative understanding. After studying real examples of *zenzen* from a variety of contexts such as Japanese literature from the 1990s to 2000s, and recent Japanese media, TV shows and blogs, early uses accompanying affirmative words were found. This finding indicates that *zenzen* can be used in both negative and positive contexts. However, the number of affirmative examples has become relatively limited compared to the negative ones after the postwar period. This implies that the normative understanding relevant to *zenzen* started to spread and became misused in that period. With further research, it was found that Korean learners of Japanese also understand *zenzen* to be used to respond to negation only. One possible reason for this is that Koreans associate *zenzen* with *jeonhyeo* which represents a similar meaning but is used in only negative contexts. In addition, volumes of Japanese textbooks published in Korea simply

explain that *zenzen* used with affirmative predicates is a misuse. Unfortunately, a negative impact of the normative consciousness was found from the farfetched translations of *zenzen* in which Korean translators excluded the affirmative meaning of *zenzen*. The findings of the present study imply that instructors of Japanese also have to be aware of *zenzen*'s affirmative use, and teach its multiple meanings depending on the context in which the word is used. Also, understanding its usages will prevent learners of Japanese from generalizing or stereotyping how the word is used. Lastly, it will contribute to a more precise translation of the adverb.

“A comparative variationist approach to borrowing: The status of lone English-origin nouns in Japanese”

Yukiko Yoshizumi, University of Lethbridge

Many empirical studies of various language pairs have shown that lone borrowed nouns from a donor language are behaving similarly to their counterparts in a recipient language (Lr) (Poplack et al. 1989; Sankoff et al. 1990; Poplack and Dion 2012; among others). However, the status of lone English-origin nouns (LEONs) in Japanese discourse remains ambiguous as the patterning of LEONs is interpreted by relying solely on prescriptive description of Japanese (Namba 2008; Nishimura 1997). In their account, a LEON followed by a case-marking particle in otherwise Japanese discourse, as in (1), is considered to be integrated into the Japanese system. On the other hand, a bare LEON, as in (2), is considered to retain the English system. (1) *Nan-sai kara ano innocence-o ushina-tta-n-darou*. what-age from that ACC lose-PAST-COP-I wonder ‘I wonder from what age I lost that innocence.’ (JECC/003/ 1:11:58) (2) *Mada party-Ø hajima-te-i-na-kattari toka*. yet NOM start-GER-be-NEG-PAST FP ‘The party has not started yet.’ (JECC/008/24:24) The latter is commonly identified as code-switched, ignoring the fact that monolingual Japanese nouns also sometimes surface bare as in (3). (3) *Rikugun-Ø zettaiteki keni-o nigichatta*. military-NOM absolute authority-ACC seize-PAST ‘The army seized absolute authority.’ (JECC/017a/208) Employing variationist methodology (Poplack and Meechan 1998), 420 LEONs are extracted from Japanese-English data and compared with 628 lone Japanese nouns (LJNs) in unmixed Japanese discourse and with English nouns in unmixed English discourse. Our comparative analyses show that case-marking rates in both subject and object positions mirror almost exactly those of their native counterparts. Furthermore, LEONs are conditioned similarly to LJNs by internal factors (e.g., verb adjacency, word order), being systematically different from native English nouns. Our findings demonstrate that bare LEONs are behaving like Japanese and confirm that they are not code-switches but borrowings as only the Japanese grammar (Lr) is operative.

2:20 p.m.–4:00 p.m. — Session 4

SESSION 4-A: PEDAGOGY PANEL [PINE EAST ROOM]

Chair: Yasu-Hiko Tohsaku, University of California, San Diego

Panel Title: 「評価が変える日本語教育：ソーシャル・ネットワーキング・アプローチ（SNA）の事例から」(The Role of Assessment in Teaching and Learning Japanese as a Foreign Language: Cases from the Social Networking Approach (SNA))

Panel Abstract: 言語を使い社会実践を行う言語能力の開発を目指すソーシャル・ネットワーキング・アプローチ（當作 2013）は、教室での評価方法も従来の教師が導入した文法や談話パターンが再生できるかを評価するものから、学生の実践能力をパフォーマンス評価やオーセンティック評価などで測る代替的评价にシフトする必要性を生み出した。本パネルでは、この評価のパラダイムシフトに焦点をあて、社会実践能力を適切に評価することで、学習者のさらなる問題解決能力、批判的思考能力、メディアリテラシー能力の育成に結び付くことを示す。発表1では、従来の評価方法とテクノロジーを使った新しい形成的評価方法を有機的に組み合わせることによって「つながる」能力、21世紀のスキルを開発する方法を紹介し、日本語教師がどのように自己の評価リテラシーを伸ばしていくべきかも議論する。発表2では、日本の大学でビジネスを学ぶ留学生が商品販売の実践を通じて経営企画や実践能力等を身につけられたかを学生と教師が協働で評価を行い比較した事例を報告し、その結果留学生の日本語とコミュニケーションスキル・社会力がどのように伸びたかを検討する。発表3では、日本語の漢字のクラスで学生の主体的な学びのプロセスを重視し、ポートフォリオなどの代替的评价を採用した結果、学生の日本語リテラシー能力の向上に結び付いた事例を紹介する。発表4では、日本の大学の留学生と日本人学生の協働学習活動を通し、身近な問題から社会問題を捉え、新たな価値を見出し社会を組み替えて行く「デザイン」力を育むための新しい評価のあり方を「評価が学生、教師、日本語教育を育てる」という視点から検討する。

「形成的評価が生む新しい日本語学習」(Creating new Japanese language learning by formative assessment)

Yasu-Hiko Tohsaku, University of California, San Diego

SNA（當作 2013）では日本語教育において、これまでの「わかる」、「できる」能力開発に加え、「つながる」能力開発の必要性を主張し、日本語を使い人、モノ、情報、社会とつながり、世界が抱える問題を解決し、社会に貢献する人間を育成する日本語教育を提案している。このような新しいアプローチでは、現実社会で日本語を使用し、生産的に生きていく日本語の生涯学習者を育てることも重要な目標となり、単に言語能力、異文化コミュニケーション能力のみならず、問題解決能力、高度の思考能力、創造力、協働力、ITリテラシーなどのいわゆる21世紀のスキルを身に付け、刻々と変化するグローバル社会に対応できる学習者を作るため、現実生活を反映した授業活動を行い、従来に比べ多様な目標を達成しようとしている。このような目標を授業を通して達成していくためには、授業のプロセスで多様な形成的評価を使い、学習者にフィードバックを出し、学習が効果的に起こるように学習者を導いていくことが有効である（William 1998）。

形成的評価を使い、学習者の能力を十分に引き出すためには、日本語教育のこれまでの評価の概念を変える必要がある。また、自己評価、ピア評価などを通して、学習者を評価に主体的に参加させることにより学習者に自分の学習に責任を持たせることも必要である。この発表では、よい評価がよい学習を生むことを示し、従来の評価方法とテクノロジーを使った新しい形成的評価方法を有機的に組み合わせた「つながる」能力、21世紀のスキルを開発する方法を紹介するとともに、日本語教師がどのように評価のリテラシーを伸ばしていくべきかも議論する。

「販売実務のビジネス・スキルと日本語力の学生による評価と教師による評価の考察」(Assessment of a basic business competence and language skills project by students and instructors)
Hideko Shimizu and Naruhiko Shiratori, Kaetsu University

本発表の目的はビジネスを学ぶ初年次留学生17名が受講するSNAを通じた授業活動における学習結果の評価の仕方を考察することである。評価においては日本語彙・会話力・企画力・協働力・問題解決力等授業の目標達成をルーブリックを作って要素分析し評価した。多角的な教員評価と共に学習者自身での自己評価も行った。授業の達成目標は、学園祭における商品販売実践の中でビジネスの基礎的な能力としての経営企画や実践、事業報告の能力等を実践の中で学ぶことと設定した。学生を2つのグループに分け、メンバー同士が教室内では直接、教室外ではLINEやWeiboなどメディアでも意見交換、Googleスプレッドシート等の共有を前提としたツールを用いて実践した。具体的には販売する商品を決め、収支計画表や工程表を作成し、看板・チラシなどのダイレクトメディアを作成して宣伝し、食材を購入・調理し、学園祭で学生や一般客に販売し、出資者に対して事業報告を行った。また、一連のビジネス活動に必要な言語学習を同時に行った。このような授業内外の学習の到達度、達成度の評価を学習者と教員の共同作業として捉え(當作2013)上記の目標を、設定した能力指標に基づき学生が「自己評価」を行い、また教員も同様の能力指標で評価した。学生自身が評価した能力と他者である教員から評価した能力を比べ、能力が身につけているかどうか、どこが足りないのか、その差を確認した。学習者全員にOPIも行って会話力を評価した。さらに、語彙表現能力の知識の形成的評価と総括的評価も行った。こういった多面的な評価を使用して、学習者自身と教師の評価を総合的に比較して考察した。

「ジャンルに基づいた漢字習得のための学習者主体の評価活動」(Learner-centered assessment for genre-based kanji learning)
Yuki Matsuda, University of Memphis

近年、学習者の主体性と学びのプロセスを重視する評価活動が推進されるようになってきた。例えば、當作(2013)が提唱する言語教育アプローチ「ソーシャルネットワーキングアプローチ」(Social Networking Approach、以下SNA)では、「言語」「文化」「グローバル」の3つの領域における「わかる」「できる」「つながる」の3つの能力を多角的かつ総合的な形で学習者と教師が協働で評価することを奨励している(當作・中野2012、p67)。本発表では、このようなSNA式の評価に対する考えを日本語の漢字のクラスに応用した例を紹介する。歴史的経緯により漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字と4つの文字を使い分ける日本語は、その文字使用自体が文化の一つであり、それゆえに日本語の文字、特に漢字が好きだという学習者も多い。そのような学習者の動機を損なわないように、本コースではさまざまなレベルの学習者が自分で学ぶ漢字を選び、自分が受けるクイズを作り、さらにポートフォリオに練習の記録やクイズ、作品などを保管するという形を取った。教師は、文字や語彙がジャンル特有のテキストの中でどのような機能を果たしているかなどについて気づきを促進しながら、それぞれのジャンルに沿った評価基準(自己PRの説得度など)を紹介した。その結果、初級の学習者が中・上級の学習者と同じような語彙、漢字を習得し、フェイスブックなどの「自己発信」活動に生かせるケースが多く見られた。この結果を基に評価をSNAが提唱する学習者主体に変えることで、日本語教育が今後どのように変わっていくかについても検討したい。

「評価が育てる学生、教師、日本語教育 — デザイン力育成を目指した留学生と日本人学生の協働学習を通して —」(Fostering students, teachers and Japanese language teaching through assessment: Development of designing ability in collaborative learning for international and Japanese students)
Noriko Okamoto, Tokyo International University

本発表は、留学生と日本人学生の協働学習活動を通し、SNAが提唱する身近な問題から社会問題を捉え、新たな価値を見出し社会を組み替えて行く力を育むための評価のあり方を「評価が学生、教師、日本語教育を育てる」という視点から検討することを目的とする。本授業は、「言語を含めた多様な道具を相互作用的に活用し、自律的、主体的に判断し、多様な他者との協働を通して社会を創っていく能力」という「キーコンペテンシー」をふまえ、従来のコミュニケーション能力を越えるデザイン力育成を目指し実施してきた。学生達がメディア制作を通して日本語の4種類の文字シフトやフォント、写真や色などのビジュアル要素にも注目し、既存のメディアを批判的に分析し、「自律的に」新たな意味や価値を創造していくメディアリテラシー育成活動でもある。学生達が、グローバル社会の課題を当事者意識をもって学び合う中で、従来のような教師が設定した学ぶべき語彙・文法項目を越え、自身と他者の学習に責任を持ち学ぶべき項目を見出す。そこは、SNAが提唱する実践の中でことばの意味が「わかり」「理解し」、人や社会との「つながり」を構築し、社会を組み替えていく「自律的学習者」育成の場となる。そこでの評価は、その都度、学生同士および教師と学生との協働を通して模索され更新されていく必要がある。つまり、SNAが提唱する「自律した学習者と教師を育成する」ための(當作、中野2012)ものでなければならない。本発表を通して、授業で行なった自己評価、他者評価などの多様な評価について検討し、評価からSNAの提唱する日本語教育の意義と今後の発展の方向性を共に考えたい。

SESSION 4-B: SECOND LANGUAGE ACQUISITION PAPERS [CEDAR ROOM]

Chair: Hitoshi Horiuchi, Akita International University

「日本語作文内の結束性に焦点を当てた修正フィードバックの効果」 (The effect of written corrective feedback on cohesion in Japanese as a foreign language learners' writing)

Shota Kawamoto, Purdue University

文と文との間の文法的・語彙的な繋がりを示す結束性については、英語においてHalliday & Hasan (1976)が包括的説明を与えて以来、様々な観点から理論的研究が進められたものの、結束性に焦点を当てた作文の指導法の研究は多くない。しかし、僅かではあるが英語学習者を対象とした研究では、明示的指導や訂正フィードバックが結束性の向上に効果をもたらすという実証研究が報告されている(Lee, 2002; Tangkiengsirisin, 2010)。本研究ではアメリカ中西部の大学で日本語201を履修している学生を対象に、修正フィードバックが作文の結束性を向上させるかを検証する。結束性に関するフィードバックを与えない統制群と、教師が明示的に誤りを訂正する実験群、暗示的なフィードバックとしてエラーコーディングを与える実験群とを比較し、フィードバックの有用性を検討する。大部分の被験者が日本語の作文を書いた経験が少ないことを想定し、全ての被験者は結束表現(指示、代用、省略、接続詞)に関する明示的指導を受けてから、トピックごとにクラス内で10分程度のブレインストーミングを行った。その上で、1学期間で異なるトピックについて250字から300字の説明文を5回書き、教師からフィードバックを与えられた。その後、フィードバックを基にそれぞれの初稿を修正し最終稿を書くことを求められた。それら5回の前後に書かれた作文内の結束表現の数を比較することにより、フィードバックの長期的効果を検証すると共に、実験開始から約1ヶ月後に書かれた作文についても比較対象とすることで、短期的効果も論考していく。最後に、フィードバックが本実験の分析対象とした4種類の結束表現へもたらした効果の度合いに差異が生ずるかを報告する。

「独学成功者から何を学べるかーライフストーリーから見る日本語独習者の学習動機と学習法ー」 (What can successful self-taught Japanese learners teach us?: Studying the learning motivations and methods of self-taught Japanese learners through life story interviews)

Tomoko Ikeda, McGill University

インターネットを利用して、誰でも簡単に言語が学べる時代になり、日本語学習者の学習歴も多様化している。筆者の勤務校でも、日本語教育機関での学習歴のない日本語独習者が、初級後半や中級レベルのクラスに編入するというケースが目立つようになった。こういった傾向に伴い、今後も教室内のレベル差、特に技能別における個人差が広がることが予想され、日本語教師は従来のレベル別の教室活動を問い直す必要性に迫られている。そこで、本発表では2名の日本語独習者のライフストーリーから、彼らの学習背景、学習動機を探り、日本語独習者と従来の学習者が共に学びを実感できる教室活動の可能性を検討する。2名の調査協力者は、独習により初中級から中級相当の語彙力、会話を身に付けた後、大学の日本語コースを1~2学期間受講し、その後再び独習に戻ったという共通の経歴を持つが、一人は他者との関わりの中で常に新しい目標を見つけていたのに対し、もう一人は他者との日本語での交流はなく、ドラマが理解できるようになるという上達の実感が学習動機となっていた。このように、それぞれの学習動機、学習方法は大きく異なるが、どちらもそれぞれの環境で「日本語がわかる私」としてのアイデンティティを形成し、そのことが独習の成功につながったと考えられる。また、大学のクラスでは、他の学習者から多くの影響を受けたと述べており、教室が彼らのアイデンティティ交渉の場になっていたことが窺えた。これらの結果から、日本語独習者のニーズに応える教室活動とは何かとともに、彼らの学びの経験をいかに取り入れ、従来の日本語学習者と独習者をつなぐ教室活動ができるかについて考察する。

「英語母語話者の日本語丁寧体動詞の使用実態：コーパスに基づく分析」 (On the use of polite forms of verbs in Japanese by English-speaking learners: A corpus-based analysis)

Hitoshi Horiuchi, Akita International University

本発表では、学習者コーパスに基づく分析により、英語を母語とする日本語学習者の丁寧体動詞の使用実態を明らかにする。データはKYコーパスを、その検索にはタグ付きKYコーパスを用いた。初級から超級までのレベル別サブコーパス毎に、英語母語話者の助動詞マスの諸活用形を含む用例の収集と頻度の集計を行った。各レベルのマス諸活用形から構成されるパラダイムの特徴と、マス、マシタ、マセンの後接語に着目し、丁寧体動詞がどのように用いられているのか分析を行った。また、英語母語話者と他の学習者を比べるため、学習者全体のデータとの比較を、更に、母語話者との異同を比べるため、BCCWJのデータとの比較も行った。分析の結果、以下のことが分かった。まず、英語母語話者は丁寧体動詞の諸活用形を初級で最も多く用い、中級以上では一般に減少する。ただ、諸活用形中、「まして」のみ中級以上で増加し、特に超級での使用が目立った。次に、丁寧体動詞の後接語に関しては、マスに付く割合は初級から12%以上で、中級以上でその割合は増加し、上・超級では50%以上となる。「ね、か、けど、が」といった語が多用される。マシタに付く割合はマスより小さく、中級から10%以上で、以後増加する。「けど、ね、んです、ので」が多用される。マセンに付く割合はマスより大きく、上級以上で70%程度を占める。「けど、ね」が多用される。以上の結果と学習者全体・母語話者のデータを比べ、対照中間言語分析(Granger 1998)の観点から、丁寧体動詞の過剰使用傾向や他の学習者にはない特徴についても触れる。

「日本語母語話者と英語を母語とする日本語学習者の意見陳述の比較」 (Comparison of Japanese native and non-native speakers' academic argumentative interviews)

Chisato Yokoyama and Yukiko Hatasa, Hiroshima University

2008年から始まった政府の「留学生30万人計画」の実施に伴い、日本国内の大学等の高等教育機関で学ぶ日本語学習者は2008年の12万人から大幅に増加し、2015年には20万人を超えている。そのような中で、留学生は、日常会話だけではなく、アカデミックな場面でプレゼンテーションをしたり、レポートを書くなどのアカデミックスキルが求められてきている。またACTFL-OPIのレベル判定のガイドラインの中にも、上級では、連続した談話をまとめたり、複段落の談話を維持できることが求められている (ACTFL, 2012)。しかし、村松 (1997) では、中上級日本語学習者は日常生活の会話は問題なく行えるが、複段落を用い、日本語として適切な談話をまとめることに困難を抱えると指摘されている。近年、アカデミック・ライティングの分野ではコーパスを用いた研究が進んでいるが、学習者がアカデミックな場面でどのような談話を構築するのに関する基礎研究も極めて少ない。そこで、本研究では、日本人大学生33名、米国の中上級日本語学習者35名に9つの意見陳述課題を課し、談話構造と使用表現について、量的および質的に分析した。その結果、英語学習者も日本語学習者も談話構成は似ていたが、論証の方略や接続詞や文末表現の使用に違いがみられた。また、習熟度によって、論証構造が異なっていた。さらに、母語話者に学習者の談話のまとまりについて印象評価をし、談話分析をしたところ、接続詞や表現の使用だけではなく、談話の終結部での意見のまとめ方などが影響することが分かった。

SESSION 4-C: SIG-FOCUSED PAPERS (AP, PROFICIENCY ASSESSMENT, PROFESSIONAL DEVELOPMENT) [LINDEN ROOM]

Chair: Etsuyo Yuasa, The Ohio State University

“Translation as a Pedagogical Tool in the AP Japanese Language and Culture Classroom” [AP Japanese SIG] Nicholas Sturtevant, Silver Creek High School (CA)

This paper seeks to address the important role that translation can play as a pedagogical tool for high school students enrolled in the Advanced Placement Japanese Language and Culture Course. While translation, when used poorly, has often deservedly come to be viewed as a regressive pedagogical practice, when used creatively and, more importantly, communicatively, translation can serve as a tremendously powerful vehicle for insight into a second language and culture. This paper will demonstrate, using student samples from an actual AP Japanese Language and Culture Classroom, how translation can be used effectively to harness students' intrinsic desire to interpret, discuss and present on various popular cultural topics in addition to more traditional Japanese poetry and literature. Student work will also be used to illustrate how the practice of translation can be used to reinforce students' growth mindset and reflection on their own language acquisition process. Comparisons will be drawn between antiquated grammar-translation methodologies and new standards-based approaches to translation in the classroom. Participants in workshops based on this paper will be asked to engage in translation exercises and will walk away with concrete activity design techniques that will be of use in their classrooms, whether they be AP courses or college-level courses in Japanese.

「留学による異文化適応能力評価の一手法としてのデジタルストーリーテリング：実践報告」 (Using digital storytelling as an assessment tool for intercultural competence after study abroad) [Proficiency Assessment SIG] Nobuaki Takahashi, Elizabethtown College

本発表は、日本留学後の学習者の異文化適応能力を測る一手法として行ったデジタルストーリーテリング制作の実践報告である。現在の国際社会において「グローバル人材育成」は教育機関においても企業においても必要不可欠な課題であり、その一助として海外留学が挙げられる。そして海外留学を通して得られるスキルのアセスメントとしては、帰国後に履修する授業を決めるためのプレースメントテスト、ACTFLのOral Proficiency Interviewや日本語能力試験など、言語スキルに対する評価は広く行われているが、異文化適応能力に対する評価は比較的少ない。その理由としては評価すべき「文化」の定義や、抽象的な「異文化適応能力」をどのように評価するかが明確に定まっていなかったことが挙げられる (Schulz, 2007)。日本語専攻の学習者に一年もしくは一学期の留学を義務付けている、ある米国のリベラルアーツの大学において、異文化的な能力理解アセスメントを始めるプロジェクトが発足した。グローバルな視野や新しい価値観などの自己変容に満ちた留学経験の評価はアンケート、日記やブログなど、様々な手法があるが、自身の経験を意識的に言葉で (口頭で) 表現することができるデジタルストーリーテリングは、デジタル映像作品として就職活動の際などにポートフォリオに入れられることから、試験的に実施するに至った。留学を経験した5名の日本語専攻の学習者に、デジタルストーリーを制作させ、その内容の評価方法や、今までは明確に評価されていなかった異文化適応能力を含め、学習者に義務付けられている留学を今後のカリキュラムの中で多角的に評価する。

「実践的文法指導トレーニングのニーズとポイント」 (Teacher training for grammar instruction) [Professional Development SIG] Etsuyo Yuasa, The Ohio State University

当大学では日本語教師養成のための様々なトレーニングを行っている。この15年程は日本語指導に必要な日本語文法を学ぶコースも出している。このコースのユニークな点は、日本語文法についての知識を学ぶと共に、文法指導に必要な実践的スキルの習得を目的としている点である。本発表では、このトレーニングで何が問題となり、どのようなスキルの習得に注目すべきか検証する。実践的な日本語文法指導のスキルを磨く為に、本コースでは学生が文法の授業のデモを行う。コースの初めには文法事項の提示の仕方についての講義もあり、コースの参加者は日本語教育の経験、日本語の知識も豊富である。しかしながら、日本語学習者が日本語の知識だけではコミュニケーション力をつけることができないように、文法の知識、文法の教え方の知識だけでは文法を効果的に教えられるようにはならない。特に、1) 明確、効果的、かつ自然な例文を作るスキル、2) 「気づき」 (国際交流基金2010) を使った指導の欠如、3) ビルドアップの仕方、4) コンテキストも鑑みた練習問題の作り方、5) 学習者のエラーを先取りした説明のために必要な学習者母語の知識不足、6) 関

連項目との関係の明示、7) 時間配分などに問題が見られる。発表では、例を挙げながらどんなスキルの実践的トレーニングが必要か述べる。近年日本語教育文法についての研究が盛んになりつつある(庵2011)。コミュニケーションのための文法(野田2005)や文法の難易度に正面から向き合った研究(山内2009)も出版されている。これらの知見を効果的に授業で生かしていくためにも、教師一人一人の文法を指導するスキルを充実させていくことが必要であると考えられる。

「日本語教育実習のあり方による実習生の学び」(Practicum students' learning as related to the form of Japanese teaching practicum)

Akiko Mitsui, York University; Hiroko Yamamoto, Chubu University

本発表では、既存の日本語の授業に実習者が教師の「見習い」の立場で参加する従来型の国内実習に参加した実習生とカナダでの日本語イマージョンプログラムのランゲージモニター(以下モニター)として参加した実習生の学びを比較、分析し、教育実習のあり方と新たな役割を論じる。教師と学生のインタラクションのあり方(Sinclair & Coulthard, 1975)や教育実習におけるコミュニケーション能力養成の重要性(宮谷, 2013)が論じられつつあるが、どのような教室活動が学習者とのコミュニケーションに効果的なのか、すなわち授業をどのように行うかの域を出ない。モニターとしての参加による実習では、実習生は教壇実習はもとより、2週間のプログラム期間中、学習者と寮で共同生活をし、全ての活動に参加することにより、授業外で学習者と日本語のみで接触する機会を非常に多く持った。2014年のモニターとしての実習生と2016年の従来型の実習生、双方の事前事後アンケート、事後のインタビュー等の分析を行ったところ、以下の結果が得られた。1. 従来型の実習生の学びは、授業内のやり取り、進め方に終始し、「教師」という立場からの見方に限られていた。2. モニター型の実習生の学びは、日本語だけで楽しく効果的に会話する体験をし、学習者の身内の立場で、自分たち以外の日本人学習者への接し方との比較により、学習者との接し方について省みる機会を持つなど、「教師」とは別の視点がみられた。このように、モニター型の実習では、従来型の実習よりも多様な学びができる可能性が示唆された。更に外国人との交流経験などの実習生の背景についても検討し、実習が学習者との関わりを多面的に学ぶ機会となりうることを論じたい。

SESSION 4-D: LANGUAGE AND TECHNOLOGY PAPERS [PINE WEST ROOM]

Chair: Junko Tokuda, University of California, San Diego

「母語話者と学習者の話ことばデータを使ったコーパスシステムCo-Chuの研究事例」(A case study with the corpus system Co-Chu using NS and NNS spoken data)

Saeko Komori, Chubu University; Matthew Lanigan

近年のコンピューターの発達に伴って、研究・教育の現場でもさまざまな利用法が提案されるようになった。しかし、言語の研究者や教師が言語データを分析可能な形式に整えて解析し結果を分析することは、容易であるとは言えない。そのためコンピューターに苦手意識がある人も平易に使えるツールとしてコーパスシステムCo-Chuの開発に取り組んでいる。Co-Chuはコーパス日本語学のためのウェブアプリケーションであり、研究者や教師が自分で収集したオリジナルデータをコーパス化して利用できる。【Build】【Import】【Edit】【Analyze】の4つの機能を一つのインターフェイスで使えるようにデザインされている。Co-Chuでは、語(表現)の検索、頻度、コロケーションの分析が可能である。検索、頻度分析では、話者の属性による表現の違いや、対話の相手による表現の使い分けの有無等を分析することができる。また日本語の発話データを文字化すると、笑い声や聞き取れなかった部分などに使用する記号などが含まれ、形態素解析には都合が悪い。そのため、記号を含まないデータを用いてMIスコアを算出する必要がある。Co-chuではこれらの処理を自動でこない、MIスコアの算出に支障のないようにしている。コロケーション分析にあたっては、Wei and Li (2013)で提案されたNグラム解析とMIスコアの計算方法に基づいて日本語用に改良したものを利用している。本発表では、Co-Chuで構築したオリジナルデータのコーパスについて、記号を含んだコーパスと記号を除いたコーパスごとに高頻度表現のMIスコアを比較し、結果の質にどのような違いが見られるかを分析する。

「仮名学習アプリ『美文字』を使った実践報告」(Exploring the use of a kana writing app in the classroom)

Ryosuke Sano, Purdue University; Shinji Shimoura, University of South Florida

コンピュータ技術の発達により、手書き文字認識を利用した入力システムが開発され、手書き入力した文字の形状の良し悪しを判断できるようになった。そして、この技術を利用した文字学習アプリやゲームが開発されている。これらのアプリは手書き入力した文字を入力中あるいは入力直後に訂正したり、きれいに書くためのヒントを繰り返し提示することができる。これは従来の紙に文字を書いて練習する文字学習では、できなかったことである。仮名学習アプリの多くが日本人の児童用に開発され、その学習方法は、薄く書かれたお手本をなぞり、それに対してフィードバックを出すという形式が多く見られた。だが、このような形式では、日本語学習者の仮名学習においてバランスの取れた文字の習得につながりにくいと考えられる。その中で、日本語学習者用に改良されたアプリ『美文字』(GLODING INC.)では、手本なしで仮名を書き、それに対し英語でフィードバックが提示される。また文字のきれいさを形、画数、書き順を基準に、百点満点で表示する。しかし、このようなアプリの日本語学習者の仮名書字学習に対する有効性は立証されておらず、タブレット上できれいに書けるようになった仮名が紙の上でも同様に書けるようになっていないかも検証する必要がある。そこで『美文字』を初級日本語学習者に使ってもらい、アプリ使用前と比較し、紙に書いた時もバランスの取れた文字が書けるようになったかを調査した。本発表では、『美文字』の概要と運用例を紹介し、学習者へのアンケートとアプリ使用前後の仮名の比較を通して、その利点と今後の課題について考察する。

「日本語口頭能力テストJOPTの開発と報告ービジネス領域を中心にー」(On the development of Japanese Oral Proficiency Test (JOPT): Focusing on the construction of the business domain)

Masahiko Mutsukawa, Osamu Kamada, and Tadashi Sakamoto, Nanzan University

本発表では現在開発中の日本語口頭能力テストJOPT (Japanese Oral Proficiency Test)について、特にビジネス領域を中心に紹介する。外国語学習における口頭能力の重要性は誰も認めるところであるが、実用的でかつ汎用性のあるテスト作りは極端に遅れている。唯一OPIが広く知られているが、種々の理由により汎用性があるとは言えない。このような状況の中、発表者らは2013年に科研費の助成を受けてJOPTの開発を開始し、2017年3月にはテストモデル完成の予定である。JOPTは、アカデミック(A)、ビジネス(B)、コミュニティ(C)の3領域から成り、広範囲にかつ実用的に使用できることを目指している。簡単な研修を受け養成されたテスターが、実施の簡易化を図るためグラフやイラストを含めた固定型の質問が搭載されたタブレットを使用し、被験者と15分程度会話を行う。テスト開始と同時に会話はタブレットに自動録音され、終了後サーバーに送られたデータをオンラインシステム上で評定・評価する。全てのテストはSTEP 1-3の3段階から成り、サーバーはこれら全てのデータを保存し、言語分析等を行うデータバンクとなる。ここで紹介するB領域は、現役の社会人だけでなく、今後社会人になる学生等も対象に、ビジネス世界で必要とされる機能的言語運用能力を測る。JOPTにおけるビジネス領域の機能的言語運用能力とは、「提示されたイラストから場面や状況を理解し、職業人として社会的・文化的に相応しい日本語で表現でき、さらに、商習慣を踏まえた上で現在あるいは将来の展開を予測し、対応できる能力」のことである。B領域のテストにはロールプレイ等も含まれる。本発表ではB領域のサンプル問題を初公開する予定である。是非このJOPT-Bを体験してもらいたい。

「学習意欲を高める形成的評価とは：テクノロジーを利用した大規模な教室での評価活動の実践例」(Motivating students with formative assessments: Technology implementation in large classroom settings)

Junko Tokuda, University of California, San Diego

アセスメントには総括的評価、形成的評価があり、日本語のクラスでもその目的に合わせて様々な評価が行われる。本発表では、形成的評価によってもたらされる学習効果について考えたい。形成的評価には学習者に自分の学びの進捗や習熟度を確認させ、クラス活動の重要性を再認識させた上で、活動に積極的に参加するよう促す効果が期待される(大中, 2014)。フィードバックを与えられることで学習者の意欲は高まるため(Shute, 2007)、適宜に評価を行うことは教師の重要な役割である。また学習者の到達度を確認することは、教師にとっても授業内容を振り返るための有益な情報となる。しかし40人規模のクラスで学習者一人一人を観察し、その理解度を把握しながら頻りにフィードバックを与えることは極めて難しい。そこで本発表では、大規模なクラスでも対応できるテクノロジーを利用した形成的評価の方法とその効果を報告する。パソコンやスマートフォン、タブレットを利用した形成的評価は、短時間で学習者の理解度を確認できるばかりでなく、評価に対する意識変化を促す可能性も秘めている。日本語のクラスでもよく行われるクイズは点数が伴うため、そうした評価に否定的なイメージを抱く学習者は少なくない。しかしテクノロジーを利用した点数がない評価活動をクラス活動の一環として取り入れることで、評価活動がゲーム感覚で参加できる楽しい活動となり、肯定的に捉えられるようになる。また学習活動や評価活動を単なる知識の伝達、受容の過程ではなく、協働的活動を促す学習共同体作りに結びつけるためにも(杉原, 2006)、こうしたテクノロジーの利用は効果があると思われる。発表では今後の可能性についても論じたい。

PART TWO
Terrace Room, Chestnut Conference Centre
89 Chestnut St., Toronto, Ontario
Thursday, March 16, 4:30 p.m.

4:30 p.m. – 6:30 p.m.: Refreshments and cash bar available

5:00 p.m.: Conference Keynote Speech (in Japanese)
Seiichi Makino (Princeton University)

“To Delete or To Repeat, That’s the Question”

Seiichi Makino, Princeton University

[Abstract]

A functional-linguistic analysis of *deletion* was systematically presented by Kuno in his 1978 book 『談話の文法』. There he stated the following: “The main objective of deletion is to lower redundancy of a sentence by deleting information known obviously to the listener, even if the speaker hasn’t said anything about it.” (p.8) I started to wonder if an act of repetition simply heightens the level of redundancy, and wrote my book 『くりかえしの文法』 in 1980. My encounter and talk with Oriza Hirata, a playwright, led me to start to reconsider issues of repetitions during the past five or six years.

In my talk I will discuss the following nine aspects of *repetition*: (1) Is an optional deletion rule called the Gapping Rule (穴あけ規則) always optional? (2) Does repetition always express *pathos* (emotion), not *logos* (logic)? (3) Is poetic emotion created by rhythmic repetitions? (4) What functions does repetition have in *conversation* and in *dialogue*? (5) How is *literary style* related to repetition? (6) What are the roles of fixed repetitive constructions? (7) When does a Japanese infant start to use repetitions interactively? (8) Are repetitions in elementary Japanese language textbooks enough? (9) What does Benoit Mandelbrot’s *Fractal Geometry* mean for the theory of repetition?

「省くか、繰り返すか、それが問題だ」

牧野成一

[要旨]

機能言語学的な省略の分析は久野の『談話の文法』(1978)で体系的に議論されている。その著書で久野は「省略の主目的は、話し手が何も言わなくても聞き手にとって自明のインフォメーションを省くことによって、文の冗長度を下げることであろう」(p.8)と述べている。それでは、反復は単に文の冗長度を上げることだろうか、と考え、私は反復の分析を『くりかえしの文法』(1980)で書いた。その後、劇作家の平田オリザと出会って話し合ったことがきっかけとなり、繰り返しの問題を過去5、6年再考してきた。

私の講演では反復をめぐる次の9点の問題点に関して話す。(1)「穴あけ規則」という随意の省略規則は常に随意か。(2)反復は *logos* (論理)ではなく *pathos* (感情)を表現するか。(3)詩的感情はリズムの反復で創られるか。(4)「会話」と「対話」における反復はどんな機能を持っているか。(5)文体は反復とどう関係するか。(6)慣用的な反復表現の役割は何か。(7)いつ日本の幼児は相互作用のために反復を使い始めるか。(8)日本語初級教科書のダイアログの反復は十分か。(9)数学者ブノワ・マンデルブロの「フラクタル幾何学」の発見は反復理論に何を示唆するか？

Panels of Interest to AATJ Members at the Association for Asian Studies (AAS) Annual Meeting

The Saga of Japanese Honorifics (*keigo*): Persistent Myth, Persistent Reality

Panel Sponsored by AATJ

Thursday, March 16, 7:30 – 9:30 p.m.

Patricia Wetzel’s (2004) *Keigo in Modern Japan* is a backdrop for this interdisciplinary discussion of the current status of *keigo* studies. It is said that Japanese honorifics embody cultural identity for Japanese speakers and serve as a tool for agency;

through *keigo*, speakers negotiate their identities in what Geertz calls “common sense” fashion. This panel examines the dynamic status of *keigo* from the viewpoints of anthropology, linguistics, history, literature and pedagogy.

Panelists:

Hiroaki Kawamura (University of Findlay) (chair)
 Mari Noda (The Ohio State University)
 Steve Nussbaum (Gustolab International – Institute for Food Studies)
 Barbara Pizziconi (University of London)
 Charles Quinn (The Ohio State University)
 Pat Wetzel (Portland State University) (discussant)

Who’s Studying Japanese? Preparing the Next Generation

Panel Sponsored by Japan-US Friendship Commission

Thursday, March 16, 7:30-9:30 p.m.

Who is studying Japanese? And why is Japanese language study important? The study of Japanese language is one of the most critical ways that students get interested and engaged in the study of Japan. This panel will focus on ways to secure interest in and support for Japanese language study amongst the next generation of students, and will discuss ways in which to engage a diverse student body.

Panelists:

Theodore Bestor (Harvard University) (chair)
 Any Catalinac (NYU)
 Ian Condry (MIT)
 Indra Levy (Stanford University)
 Motoko Tabuse (Eastern Michigan University; AATJ)

Teaching Translation and Interpreting in a Global Age

Round Table Sponsored by AATJ

Saturday, March 18, 5:15-7:15 p.m.

To mark the inauguration of AATJ’s newest Special Interest Group (SIG), Translating/Interpreting, educators and practitioners discuss the latest developments in teaching the much-needed skills of interpreting and translating. Their topics will include: how translation courses simultaneously develop students’ translation skills and their overall Japanese proficiency; teaching business, technical, and literary translation; helping students who are interested in careers in translating and interpreting; and making cross-language skills one of the cornerstones of cross- cultural education.

Panelists:

James Davis (University of Wisconsin, Madison)
 Janet Ikeda (Washington & Lee University) (chair)
 Yoshihiro Mochizuki (University of Michigan)
 Stephen Snyder (Middlebury College)
 Anna Zielinska-Elliott (Boston University)

VISIT AATJ AT BOOTH 211
IN THE AAS CONFERENCE EXHIBIT HALL
ON FRIDAY (3/17), SATURDAY (3/18), AND SUNDAY (3/19)!
(AAS Conference Registration Is Not Required to Visit the Exhibit Hall)